

第26回全国町並みゼミ - かしはら・今井大会

第11分科会（大和高田市分科会）

（第4回 夢咲まちづくりセミナー＆座談会）

「ゆっくり、じっくり町づくり」コミュニティの再生
「町並みとまちづくり」 - 伝統ある町の躍動と輝き -

2003年12月

大和まちづくりネットワーク・夢咲塾



第26回全国町並みゼミ - かしはら・今井大会 第11分科会 (大和高田市分科会)
(第4回 夢咲まちづくりセミナー&座談会)

テーマ: 「ゆっくり、じっくり町づくり」コミュニティの再生
「町並みとまちづくり」 - 伝統ある町の躍動と輝き -

基調講演・コーディネーター 片寄俊秀 (関西学院大学教授)
パネラー 山本陽一 (新町塾世話人代表)
的場照之 (高取むげん塾会長)
天川佳美 (港まち神戸を愛する会)
中山雅子 (夢咲塾代表)
大和高田事例報告 上嶋晴久 (大和まちづくりネットワーク・夢咲塾)
分科会担当 大和まちづくりネットワーク・夢咲塾

日時: 分科会: 平成15年9月20日(土) 午後2時30分~5時30分
交流会: 同日午後5時30分~7時30分

会場: 専立寺本堂(11分科会) 専立寺門徒会館(交流会)

後援: 大和高田市・大和高田市教育委員会

参加者: 約65名

概要:

今井会場より参加者をバスで移動、さざんかホールのハイビジョンシアターにて大和高田の概要ビデオを鑑賞、天神橋商店街を歩いて専立寺会場まで大和高田の町を徒歩にて、初めて来られた参加者の予備知識とするため大和高田の見学をいただいた。

伝統的な町並みを有する町で、主に市民主体となっていて行われているソフト面での「まちづくり」において、どういう変化を必要とし、何を望んでいるのか、又その「まちづくり」により何が可能になったのか、各地の成功事例を基に、期待しうる「まちづくり効果」等の意見を出し合い論じ合う会議とした。具体的には本分科会の開催地である大和高田市で行われているまちづくりの夢や苦悩などを題材として、参加者自らが地域で行って来たまちづくりの経験を基に、固有の問題を持ち寄り「まちづくり効果」を導き出す為の解決策を論じ合うことにより相互の理解を深め共通の課題と解決の糸口を探る機会を提供するものとした。

片寄氏による基調講演「今ひとつパッとしない町の町づくり」により問題提起され、夢咲塾による大和高田市の現状紹介、各地の事例紹介をパネラーにより報告された。

内容:

司会者(上嶋氏): 11分科会の開会の挨拶と、本日のタイムスケジュールの説明。

井上康二氏: 大和まちづくりネットワーク代表の挨拶

失礼いたします。この分科会、大和まちづくりネットワークの夢咲塾さんが中心となって開会の準備をしていただきました。少しあの大和まちづくりネットワークということについてお話をしておきたいという訳なんです。普通、全国町並みゼミの中では、こういうまちづくりをメインに扱うということはそんなに多くはないと思っております。大和まちづくりネットワ

ークが奈良県の奈良市あるいは今井町、大宇陀町、あるいはこの高田、高取、吉野、各地に古い町並みを持っている地域の中で、特に町をいきいきさせようという視点で活動している集まりでございます。今回、特に夢咲塾さんのセミナーとうらはらにゼミの分科会という形で開催をしていただきました。私ども今井町の方が振り返らせていただきまして、平成3年にいちばん保存という問題についての住民の間での話し合う機関、あるいは会を設けました。そんな状態の中で、大和町づくりネットワークに参加しておりました私どもの方の実施団体は「青年会」という団体で所属しております、その中で大和まちづくりネットワークという催しは再発見展をしようということで一年かけてさしていただいた思いがあります。その時にうちの町が一番厳しい中で、やはりこういうネットワークというもののお互いの支えがあって無事に開催をするともに、私たちの町の方向を決めることができたという風に考えております。皆様方の方におかれましても、いろんな問題、課題というものがあるかと思えます。ぜひ、まちづくりの基本であります、人づくり、またその人づくりは自分づくりという視点に立って町をいきいきさせていきたいという風に考えておる一人でございますので、今日はいろんなパネラーの先生をお招きし、それぞれにしっかりと勉強会を開いていただければと思っております。

最後に、こういう場所を開いていただきました夢咲塾の皆様方、また、今日来賓としてお来し頂いております高田市長様につきましてお礼を申し上げます。ありがとうございました。どうぞしっかりと皆様方いろんなご意見を出して頂ければと思えます。ありがとうございます。

吉田誠克氏：大和高田市長の挨拶

みなさんこんにちは。ようこそ大和高田市においで頂きましてありがとうございます。まちづくりということで私も20年、一生懸命頑張ってきた仲間でございます。本日は本当に私も楽しみにしております。

簡単に大和高田市を説明させていただきますと、奈良盆地の西のちょっと北側に位置しています。そして、古くは大阪なにわの宮と飛鳥とをつなぐ交通の要所として発展をして参りました。そして、それが伊勢街道につながり、そして、専立寺、ここのお寺の住職でございますけども、専立寺が1600年にここに建立されて、そして新生大和高田の現在の形に近いような形でその時分から発展してきた非常に歴史のある町でございます。そして、商工業を中心に商都高田として発展をして参りましたけれども、最近やはり、どこの町でも同じように古い町ってというのが、車社会という発展のもとにひえいしてしまっていて、そして経済の不況の中でまたそれが加速され、そして人が外へ、新しいところに移って行って大和高田市自体の人口も少し減る傾向にあると、そういう状況でございます。その中で、まちづくりという言葉が、ここ10年、15年ぐらいですかね...私も頑張ってきましたし、そういう芽が大和高田市にも芽生えて来まして、そして、今日頑張って頂いております夢咲塾、私も一期生として頑張らせていただいておりますけれども、そういう中で、自分の生まれた町を自分の手でもう一度しっかりと考えて、自分の出来ることから何か始めていこうと、そういう考えを持っていただいている人が増えて参っております。本日こういう会を与えて頂いて、今日勉強させていただく、知識と意識とを頂きまして大和高田市という土壌にしっかりとそれを入れさせていただいて、そしてその土壌の中で、高田市の土壌の中で一つ一つ新しいも芽を育てていく、それが我々の仕事だろうと思えます。では、楽しみに最後までお付き合いします。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

脇屋住職：専立寺住職のあいさつ

はい、失礼します。このお寺は実はあの高田御坊と通称申します。宗派でいいますと、浄土真宗本願寺派でございますけども、実はまちづくりというのは非常にこの浄土真宗という宗派として蓮如以来かかわっております。簡単に言いますと五個所御坊、ここ高田、田原本の浄称寺、今井の称念寺、それから畝傍御坊の信光寺、それからもう一つ御所の桑山さんの所の円照寺。この5個所、これが昔の本願寺のかけ所、直轄のまゝ、出張所でしょうね。本当は本堂の門の前にこういう図面だけが残っていますが…。17間四面の大きな本堂があったのですが、天保年間にまゝ、落雷で燃えたとなつて、私まで歴代住職みな力ございましたもんで、なかなか難しゅうございましたが、しかし、今の吉田市長もおっしゃいましたが、市長自身もここが第二のホームグラウンドといいますか、町づくりは実はこの寺から出発しております、本当に。ここで、いつも若い人が集まってあれやこれやと申します。私自身はこういうお寺で冷暖房したりあるいは、椅子を使ったり、とにかくお寺にはコミュニティーホールと思って使ってくださいというのが私の趣旨でして、ここからいろんな情報の発信をしております。言うてみたら、そういう町づくりは、浄土真宗のお寺は非常にこう存在がありまして…。帰りに大きな門のすぐ下に3年前に瓦を全部ふき替え、もう一度解体修理しましたが、降ろしてみまして私もビックリしましたが、文化10年という名前で瓦の横に「かめのせむらふじい」とありましてね、施主、問いや何なに、それからあと、油屋何べいと書いていますが、調べたんです。今で言うと、王寺町の藤井というところの、かみのせむらの一番山高の狭いところの寺社でのあの大きな瓦ね…一応八千枚とかあるんですが…全部その二人が寄付したんですよという意味なんです。それでその藤井のお寺の住職に聞きましたら、昔は、堺から船で王寺のカミナシまで物を全部運んで、もう少し先の王寺の向こうまで運んだ後、ケンサキ船、底の浅い船で、奥は桜井の手前まで、奈良盆地は全部山川が集まっていますもんで、小さな船で運んだらしいのです。その通行税をとっていたんです。そこの問屋さんと油屋さんが豪商ですはね。ちょうどあの琵琶湖の通称で、カタダの本福寺の門徒が、琵琶湖の海運を握ったんです。ある瀬戸内海で村上水運が全部その利権を握っておったと同じ歴史で浄土真宗の門徒だったんでしょ。そんなことで、町づくりのもとには、そういう民衆とか当時の大きな経済とか、この町でしたら、この御坊も、お寺中心に、市長もおっしゃいましたが…およそ400年少し前にほぼ、まちづくりが出来たんですよね。ですから、その一つのお寺も現時点でまちづくりに関しては決して無関係ではないという意識で本日のこの催しも、もろ手を上げて歓迎いたしております。十分な設備はございませんけども、どうぞごゆっくりとお互いの交流を図っていただきまして、やはりありがたいのは、そういう歴史と時間の中で今を私たちは生活してもらっております。もちろん便利不便でいきますと、大阪や東京は便利でしょうけども、しかし、潤いとか豊かさで考えましたら、こういう地方の都市にも素晴らしいものが先人の努力で残っております。どうぞごゆっくりと勉強に役立ててください。どうもありがとうございました。

司会者(上嶋氏): 本日のコーディネーターとパネラーの紹介

基調講演 片寄俊秀(関西学院大学教授)

大変素晴らしい会場を貸して頂きありがとうございました。片寄と申します。実はあの、私、

奈良の出身でありまして、奈良女子大学の付属幼稚園・小学校・中学校・高校と卒業いたしましたので、大学はさすがに入れてくれませんで行きそこなっただけですけど...奈良の出身でありますので、まあもともと、全国町並みゼミ保存連盟のことはかなり切実と最初から参加しておりますものですから、何かしなくてはならないと思っておりました所に、上嶋さん...私、あの長くお世話になっておりまして、彼からの電話かかってきましたら何度も引き受け、すぐに喜んで今回の進行を引き受けました。昨日誰かが、今回えらい大学の先生がでしゃばっているということ言う人がいたんですけど、あのいろんな所に学校の先生や学生が来ておりますが、あの誤解しないで下さい。あのね、みんな勉強してるんです。ここに来ている学者とか先生、学生とか優秀です。つまり、嗅覚を働かせて、世の中を見たときに、ここに何かがある！というね...何かがある！一番最先端がここだという嗅覚を持った優れた連中が来ていますので、あの、思い切りこき使っていいと思います。世の中にいろんな学者、先生がいますが、その中でもとっても優秀な連中が来てると思います。それで気にしないで、大いに皆さん、こき使うという姿勢でお願いします。毎年来て頂いていてますけども、台湾の「楽山文京基金会」の「丘先生」がお見えになってまして、ご紹介します。台湾の、最も有力な文化団体の理事長です。あの台湾の方も今、地震がありまして、あの子の復興について、彼女はものすごい獅子奮迅の努力をされて、で、町並み保存連盟も少しだけでもお手伝いして頂ければと思います。

今からお話をするわけですが、実は、今から私、このタイトル第 11 分科会「ゆっくりじっくり町づくり」～伝統ある町の躍動と輝き～は、立派なタイトルなんですけども、何か違うんじゃないかと思ひまして勝手に変えました。「今ひとつパツとしない町?!のまちづくり」...市長さんもおって、これよかったんかなと...このテーマは本当に...近鉄高田駅前...まあねえ、あそこパツとしないじゃないですか...このテーマは今まで本当に、町並みゼミでこれまで一度もやってこなかったテーマなんです。大体どこも、例えば、木曾つまごだとかあるいは京都あるいはこんぴら山だとかね、みんな知ってるじゃないですか。有名な、あっ！あそこか！！ブランドですよ。大和高田！！これはどうでしょう...ブランドじゃないです...そこらと比べるとですよ、五條！うーん...四條は知ってるけども...失礼な話ですけど率直な話でありますけれど、大和高田市は有名なブランドとは言い難い。しかし、その歴史的な蓄積、環境、立地条件は決してブランド都市に劣らぬものがある。しかも、熱い思いを持って活動を蓄積してきた市民のパワーが育っている。「夢咲塾」夢が咲くなんていいじゃないですか！！こういう人たちも育っています。いろんな方が育っておられると思います。努力と適切な仕掛けで全国ブランドにのし上がるポテンシャルはある...ある！！と断言します。全国の町並み保存連盟、いろんな団体いろんなグループが参加してはいますが、決してブランドでなかった町が、あつと言う間にブランド都市になったという経過がいろいろある。今ひとつパツとしない町をパツパツと行きますけれど、先ほどさざんかホール前のお昆布屋さん、例のリサイクルショップ、最近出来たライブハウス、それから夢咲塾の面々と...こういうちょっとした変わりよう。今、大体我が町をパツとさせる必要があるのかどうか？ここからみなさんに考えてほしいと思います。パツとせんあ...というのは、日本中3千いくつもの自治体がございますけど、おそらく95%ぐらいまでがパツとしないんでしょうね。今、申し上げましたけれども、みんなが知っているパツとした町というのはそんなに沢山ありません。だから私は、パツとしない町をパツとさせる研究というのを取り組んでまして、これに成功すれば、一生食いはぐれない...という考えなんですけども...これはなかなか難しい。まず住民がそれを望んでいるのか？パツとした

いと思っているのか？どうですか？これは、大和高田の人はパッとしたいなあとおもっているのだろうか？例えば、パッとした町が必ずしも住みよいというわけではないんですね。例えば観光地...実はあの、奈良市内、京都で勉強をしまして、長崎に26年住んで、宝塚に約一年近く住んでいたんです。今は、尼崎というあんまパッとしない所にすんでいます、それからいろんな所を転々として...、観光地は住みにくいです。なんでか？物価が高い。お店がお客様に親切でない。住みよい環境と観光地というのはなかなか両立しない。そう考えますとパッとすることはそれほど価値はないんです。しかし、パッとしない町に住む悔しさは確かにある。大和高田はどこですか？奈良からずーっと行って飛鳥...飛鳥を目指してですね...奈良で知られているのは奈良と飛鳥だけという説があるんですけども...飛鳥のちょっと手前に八木という所がありまして、八木のちょっとここが大和高田！！長い時間がかかりますね。説明するのにこんな時間がかかる。こんな悔しいことはないですよ。お宅どこですか？宝塚...。あっ！！いいところに住んでますね。宝ジェンヌがいつもサーッと行くんでしょ。確かに行くんだけど...私も宝塚に住んでいたときに宝ジェンヌに会えるかなあと思ったけどもなかなか会えない。何もいいことはないけども、宝塚はみんな知ってます。奈良・京都、これはみんな知ってます。だから、いちいち説明しなくてはいけない悔しさというのは、パッとしない町に住んでる人というのはみんな密かに持っているんですよ。お宅どこですか？と聞かれたときに倉敷です。あっ、倉敷ですか...なんとなく言うじゃないですか。でも、パッとしない町に住む悔しさはどうなんでしょうね。いつまでもパッとしないまま放置しておくとか何かマズイ事態が起るのではないかとこれはですね、実はアンケートというか、私は若い人に聞いてまわったんですけども、確かにあるんです。うちの町はパッとせんしおもしろくない。こういう若い人結構多い。やっぱりパッとする町に住んでいる人はなかなかいないんですね。やっぱり若い人たちが大事に育てていこうという時に、パッとするかしないか！これは大人の責任ですから、これはやっぱり、パッとさせたいという方が正しいかもしれません。何かこのまま放置しておく、若い人たちは逃げ出すとかね...。何かまずいことが起るのではないかとそういうんでは、パッとしないなあという気は僕もしております。ただし、地味なママがいい。最近の結婚式では地味婚、地味にいこう、スロウにいこう。地味のママがいいという気持ちは大切にしたい。その、観光地のようにパッパカしていて物価は上がるし、お客様が来て...それもいいんだけど、しかし、やっぱり、地味の方が、前の方が良かったなあというこの気持ちも大事にしたい。となると、ほどほどのまちづくりという着地点があるんじゃないか。こんなこと今まで誰も言ったことはない。「ほどほどのまちづくり」私が初めてです。そういうまちづくりの展望というのは、今まであんまり確かに、今までの日本のまちづくりの展望というのは、高度成長ばかり...何か人口が増えるようになる。産業がどんどん良くなる。店が栄える。地価が上がって、そこに住むのがブランドになる。そういう高度成長ばかりをねらってきた感じですけども、ほどほどというそういう考え方もあっていいんじゃないか。ところで、ちょっと話がかわりますが...ブランドでない町をパッとさせるということは可能なんだろうか？これは可能なんじゃないかと僕は思っております。いろんな所見てきた、あるいは、いろんな所調査研究してきた私の勘としてはですね、可能だ！可能じゃないか。どんなことでもどんな町でも観光の対象になりうる時代...今ですね、何でも観光、何でも観光になるんです、観光の様変わりといいまして、英語で quality tourism、学びの旅と僕は訳していますけど、これがあの、tourismつまり、旅行、観光のですね主流になりつつある、団体でパック旅行...行ってどんちゃん騒ぎ

してカラオケ歌って終わり。こういう観光はもう終わった時代である。今、JTBでは、日本旅行でも、ああゆう団体で稼ぐ量はどんどん縮小してしまっていて、今は quality つまり、質の高い観光をねらってます。みなさんの行きたい所、こういう提案はどうでしょうかと、いう提案をしてみたりですね…。エコツーリズム…自然を探求する旅ですね。ヘリテージ・ツーリズム…歴史を探求する旅。インダストリアルツーリズム…産業遺産、産業の現場を見る旅。アグリツーリズム…農業ですね。農業観光、農村に滞在して、あるいは百姓のお手伝いをしたりして…。そしてそれが観光になる。スタディーツアー…これはまあ勉強。修学旅行は一つのスタディーツアーですね。僕たちの記憶には枕投げしかないけども…。今やっぱり、本当に学ぼう！で、ソフトツーリズムというんですけども、これはハードツーリズムと対比させるんですが、ソフトツーリズム…これは現地に迷惑をかけない観光なんです、その観光する側とされる側という問題なんです。日本でこんな観光があっただいぶ減りましたが…アイヌの生活を見る観光。こんな観光あっただいぶ減りましたが…本当に腹が立つような観光がちょっと前までありました。最近はいくらそういう流れは無くなったんですけど…。今、アメリカではやっぱり、インディアンの集落を見に行く観光…うわーインディアンはこんな暮らしをしているのか！！という観光が世界中でいくつもあります。そういうその見る側と見られる側の対立、見る側と見られる側の戒律。離れた関係。個々が通じ合えない、通じ合わない。というのがハードツーリズム。だから、現地に行ってゴミを捨てたりですね、そういう観光…そうじゃなくて、現地に行ったら絶対ゴミを捨てないし、場合によっては町の人と一緒に掃除をしている、綺麗に保とう！という観光…それがソフトツーリズムと言います。で、こうやって考えますと、どんな所でも観光地になる。今、おもしろい観光地がたくさん出来ています。すこし町おこしなんかで名前が出ますと、いろんな人がやってきます。今からそういう事例もご紹介しますが…で、そういう所はですね、「友あり遠方より来たりまた楽しからずや」なんて言葉がありますよね。友として迎える。つまり、観光客対地元民の対立じゃなくて友なんです。心を通じ合って、そしてまあ、よく来てくれた…。心の中では、お金を落してくれるという捨て切れない気持ちがあるかもしれないけれども、しかし、お互い人間と人間というそういう関係での観光。そうやって考えますとどこでも観光地になる。ちょっとした魅力がある。それだけで観光になる。全然魅力もないところがありますよね。なぜ、そこに魅力がないのか、と設問しただけで観光地になるんです。もうさびれた所…なぜそこがさびれたのか？そういう眼差しで見れば、観光地になりますね。だから、どこだって観光地になる時代。しかし、本当はリピーター、つまり、魅力があればですね、リピートもう一度言ってみよう、あの人と会いたい…そういう人間と人間との交流。温かい関係は何度も何度もやってくるだろう。そこがポイントだと思うんですよね。もうあんなと二度と行きたくない！というのは観光地ではない。やっぱり、また行ってみたい、あそこのおいしいものを食べたい。あの心のコモったお好み焼きが忘れられない。こういうのが非常に大事なポイントでありまして、とにかく、リピーター・ファン・サポーターそういうことだと思います。で、そういうのが育つのが本当の意味での観光地だろう。で、まあパッと変身した事例をいくつかご紹介したいと思いますけども、大分県に由布院…まあブランド中のブランド名ですね、由布院温泉。私、実は、1970年～96年まで26年間長崎に住んでまして、九州のことをいろいろ研究しましたが、観光地の問題というのを私は大きい研究テーマとしてしまっていて、由布院…もう最初のころから付き合ってます。実は、最初に由布院に行った頃どんなことを言われたか？まず、この町に子どもは残

れるか？というんですね。残れるだろうか？というシンポジウムをやってみました。この町に子どもは残れるだろうか？悲惨なことだ……。どんどんどんどん人が出ていく。若者が村から、もう村を見捨てて出て行ってしまふ。あそこはですね、今でこそ、すごい女性に人気の観光地ですけども、僕の行った頃はまだ、出島という汽車喫茶があって、長崎から由布院に停まってお客が降りたら、駅に番頭さんがズラーっと並んで、うちに泊まって下さい！！と、手を引っ張ってた。そういう客引きをやっていたんです。そのちょっと前がですね、実は朝鮮戦争の時のアメリカ兵の慰安施設だった。そういう悲惨な歴史があった。由布院というのはですね、自分の町をよそで説明する時に……お宅どこですか？あっ！別府の奥別府です……。こう言ったんですね。奥別府……誰も知らない。しかし、別府はみんな知っている。しかし、別府からの一步入った所が由布院だと説明した。その悔しさが一つの大きいバネになった。そこに、経済的な村おこしの達人、カリスマが出てくるわけですけども……そういう人たちの努力もありますが……私、あの、由布院の「かまのゆ」の溝口さん、中谷健太郎さんとかとよく親しくしているんですが、一度、溝口さんにお尋ねしたことがあるんですよ。私、長崎において、長崎の観光がどうも調子悪い……由布院からみてどうですか？といったら、私たちは針でほじくる様にして、町の中で売れるものはないか、これは売り出せないか、というのを本当に一つ一つ掘り出したんですよ。長崎なんて熊手でがばっと取っているだけじゃないですか。という指摘をされたんですよ。たくさん残っているって言うんですね、宝物が……。いくらでもあるじゃないですか！由布院は何もない。何もないことが価値が有るということに気が付いたんですね。何もないことを売り出そう。都会の人はみな疲れている。いろんなものがありすぎてから、由布院においでください。由布院は何もないです。ポーっとして下さい。これが価値の有ることに気が付いたということをおっしゃるんですね。昭和30年代の町を再現した大分県豊後高田市。これ次に紹介しますが、これはおもしろい。豊後高田、ここは、大和高田、あと陸前高田というのがあります。高田市が新潟県にあった……これは最近なくなりました。なくなったのは知らなかったんですけどなくなった。ところがですね、この11月頃ですかね、確か広島県に安芸高田市が生まれる。高田4つ出来る。美味しいところあるとこばかりでしょ。豊後高田とか、陸前高田とか安芸高田……大和高田だけ何もないちゃうか……。これは、ちょっと心配になって、美味しいものの交流とかですね、そういうのがやれるとお互いにその地域を作り合っ、そして……いいのが来たよ～陸前高田の魚がここに来ましたよ～という、そういう交流が出来ると非常に活動があしたかですね。高知のカツオ来るよ～そういうこうりゅう交流ができる……。照葉樹林の町、有機無農薬農業の町おこし、これは有名ですね、宮崎県の綾町……これはあやまちではなくて、あやちょうと呼びます。宮崎県の綾というところですね、ここは照葉樹林、実にあの美しい緑がですね、これををのこす。そして、その有機無農薬……町です、できる産物にブランドをつけたんです。町でもって、これは有機無農薬ですということ、綾のブランドがつく。綾の名が付くだけで、物がポンと上がるんですね。そのぐらいの町おこしに成功しています。今、そういう九州ばかり出てきて申し訳ないんですが、私、一生懸命、九州で働いていたものですから、九州ばかり出てきますが……あと、意識的に個性を追求した大都市近郊都市。福祉の町、図書館の町、音楽の町、いろいろあります。例えば、東京都はなかなかそういう町がたくさんあるんですよ。例えば、図書館で有名なのはですね、東京都の日野市、これは有名ですね。図書館がですね、町の中心として育ってしまっ、そして、どこでもいつでも図書館で本が借りられる。そういうことをやった。「私はいつまでも日野市

に住みたい。なぜか？図書館がそばにあるから・・・」こんなことを言ってる、そういう町おこしをやっています。それから、福祉の町の町田ですね。町田・・・こっちももう1960年代からやりだしたことなんですけども、福祉の町で有名です。音楽の町、高崎ですね。あの文京でここに泉ありという有名な映画がありましたけども、その音楽・・・といろんな個性を追求した町もあります。で、この大和高田、豊後高田、昭和の町。これはおもしろいコンセプトですね。たまたま僕はこの町では、この昭和の町を始める前にこれからやるんだという話を豊後高田で伺いました。これをしゃべった人はですね、豊後高田の商工会議所の職員。変わった男でしてね～、考古学の専門家なんです。職がなかったのか、何か知らんけど商工会議所で雇われて、ずーっと何か仕事もやってたか知らんが飛ばずだった男が、突然目覚めたのか、この町を何とかしなくては！昭和の町に行きたい！昭和レトロだ！と、なんか思いつめて、それから考え出して、このあたりをこう変えればこうなるこうなる・・・といろんな人に説いてまわって、そしてやり始めた。これはまあ、市長さんがバックアップしたということは何ですけども成功しましてね・・・その話がちょっと広がって、5～6軒の家が少し昭和のことをやりだした、豊後高田は昔は随分有名な所だったが、日豊線から一步入らなくてはならない、へんぴな所で、人口は、三万人切ってると思うんですけど、そこは商店街なんていうもんじゃなかった。しかし、そこには、いろんな宝物があるということを彼が一生懸命みんなに伝えたということが発端なんですけども・・・ミルクセーキが食べられる。えっ、そんなことか・・・ということですけど、結構美味しいんですよ、このミルクセーキね。で、いろんな人たちが、まあ参加しましたよ。この話が出だして、もう少し動きだしたら、博多から観光バスが来だした。というんですね。今はもうすごい何十台という観光バスが来るようになった。わずか2年ぐらいだと思うんですけどね、ここは何屋さんだった？コロッケ屋、何となく口コミで知られたら、最近みんな来るとですよ。あの時一日二千個コロッケ作りました。そういうぐらいの人気が出た。それもこの上の看板みんな取ってしまったという。あの、天ぶらの衣みたいなのを付けている看板よくありますけども、あれを取って・・・ここから僕の写真じゃなくてインターネットで入れたんですけども、パクリで申し訳ないんですが、今までは全部僕の写真です。これも全部ですね、天ぶら看板つけて洋風に見せかけてると・・・よくあるじゃないですか。田舎の商店街でだいたいそんなの多いってよく言いますが、全部取っ払って昔の姿とした。すると、それが逆に人気が出てきたということなんです。もうノリノリですよ。どこも文字を右から書いてありますね。これは、昔のやつをもう一回リニューアルしたと思うんですけど、そういう風にいるんなお店が30年代レトロで・・・こんな車を展示したりですね、こんな魚屋さんもなかなか面白いですね。今、絶えず一生懸命やっていますね。それから、カフェバーで30年代の給食をそのまま再現して、それをやっていたと・・・これはなかなかのアイデアで、ずいぶんお客さんも喜んでるそうなんですけども、そんなお店があると、で、パッとさせた効果はどうか？それはですね、胸をはって自分の町の名前を言えるようになった、どうですか！豊後高田。こないだNHKのテレビ見た？出たでしょ。長々とやってましたね。もう民放ではいっぱいやってます。観光客がやって来て観光シーズンが増えた。店が賑やかになった。我が町に若者が戻ってきた。戻ってきた人はたくさんいます。東京の銀行に勤めてた人が辞めて、なんか、どこかの支店長に言われたんですけども、もうこれ以上東京は住めん！辞めてきました。帰ってきました。と餅屋の二代目。今お店をやっているハンサムな兄ちゃん・・・嫁さん東京から連れて帰ってきた。なんか、あのそういう人、辞めた人だから若者が帰ってくる。それから、帰ってくる

だけじゃなくてよそから、仕事もある。人口が増える。町の産物にブランド価値が生じる。こういうことですね。だから、売るものがどんどん出来てる。しかし、先ほど言いましたゲストとホスト、つまり、観光客と地元住民との深刻な問題は発生しているであろう。もう来ていらん、観光客はうちの家まで、半分まで商売している。してない人まで家までのぞいてくるんですね。これ、迷惑でかなわん。観光地化なんか全然喜んでない人もたくさんいると思うんですね。迷惑だと思っている人がいるかもしれない。移り気な観光客に翻弄され始めた。それはやっぱり水商売だ。観光とは難しい産業でしてね、観光はいいんですよ。座ってて金が入ってくるから。よそからのお客さんがお金持ってきて落して行くものだから、セールスに回らなくてもいい。非常に効率のいい産業なんだけど、同時に移り気がある。特に一番恐いのは、戦争、災害、それから病気。こないだのあのC型肺炎ですね。あの時は、本当にあれで後遺症…今もたくさんあるんですけども、ああいうこと。あるいは、一番こわいのは、口コミだそうです。もうあそこはダメ、もうあそこは俗化した、とかですね。最近、由布院がよく言われていることです。黒川温泉の方が絶対いいわ！とかね…。何言うてんのという話ですけど、由布院の人は、もうちょっと客が減ってくれた方がいいんだ。と言ってますけども、それは負け惜しみかもしれないですけどね。移り気な観光客に翻弄される。これはかなわんですよ。私は奈良で育って、京都で…と関西地方ばかりまわって大体分かるんですけども、感覚で、いや大変です観光地というのは…。で、ちょっと振り返ってみまして、我々はですね、何か間違ってきたんじゃないのかということに僕は最近つくづくと思っております。僕の歳になりますと、過去を振り返るべきになったのかなあ。1960年代を、未来都市はこうなんだ、理想町はこうなんだ、と言っていた時代があります。こんな絵、覚えている人はいますかね？ 真鍋博さんもうこの方も亡くなったと思いますが、こんな絵から本当に夢を抱きました。未来はこうだ！ジェット機が飛ぶんだ！高速道路がビューっというって、そして空には、人口衛生、高層ビルがバンバン立ってきて、これは夢の町だ！夢の未来は本当に素晴らしく輝いている。1960年代みんなそう思ってた人、結構多いんです。私も子どものころ、本当に60年ころですね、そういう源素材これが未来だ！素晴らしい！と思ってたんです。これが全部出来たじゃないですか、今。全部出来てしまった。日本は良くなったんですか？この町は、この国は、あのころの幻想は何だったんだ。あの頃は、未来学会というのが出来て、未来はこうなんだと言っていましたけども、あれはどうなったんだろう。手塚さんも今、随分評価高いですけども、手塚さんもかなり、こんな絵をばらまいてくれました。こうなるんだこうなるんだ…全部出来ました。鉄腕アトム…飛んでますけども、まもなくロボットも飛ぶでしょうね。まあ、この未来これ1979年、このころはリアルな状況になっているわけですが、本当に全部できてきた。そして、我々はどうなったのか？ということに反省するべきじゃないか。その反省を与えてくれたのは、やっぱり阪神淡路大震災ですね。これはやっぱり、浮かれていた我々の町づくり国づくりのこの歴史に天誅を食らわしたという気がしてなりません。いけいけどんどんバブルのつけ。これは…生き急ぎ日本人、そんなに行き急いでどこへ行くの、という警鐘であったという気がしてなりません。町は災害に弱くなった。しかも、今やっぱり、災害の問題、普及、復興の過程で人々が本当に災害で苦しんでいる。この苦しんでいる人を救う仕組みがない。コミュニティが崩壊してしまっただけ。見せかけの復興。地域再生の数々の教訓とまとめましたけども、今日は神戸から天川さんが来ていただいておりますので、その真っ只中で活躍してくれたんですけども…お話ししていただけるかと思えます。で、ほどほどの町づくりということで少し展望を話してみ

たいと思います。なんでかヨーロッパで申し訳ないんですけども...上手いんですよ。あの、外国崇拜じゃないんですけども、やっぱり上手い。これはやっぱりかなわないなという気がしますよ。そこで、ドイツのゲンゲンバッハという小さな町、たった1万3千人なんですけど、これは町の真ん中の広場なんです。あの、大道の露天市がありましたけども、ああゆうのですね、これは土日にかかれるんですけども、楽しいでしょ。町の雰囲気...1万3千人の町でこれほど賑やかになるのか!で、これはですね、オランダのミデルブルクという人口4万、人口4万ですけども、あの、周辺からの人も来るんですね。で、右下が市役所とその広場前の市役所前広場の日曜日、サンデーマーケット、実はこの人口4万の住む町はですね、第二次世界大戦の時に完全に廃墟になった。パブルの時代廃墟になった。そして、あの市庁舎の建物、実は左側のどろどろのあの建物、あれを修復して再現してですね、そして、今あんな町ですね。これはやっぱり、本当にすごい執念だな。町づくりに対する、町に対する思い入れっていうのかな...。執念っていうのは...、ここまでやるのか!!我々が本当に欠けているところ、日本人の学ばなければならないとこだろうし、人口4万ですけども、こんなに楽しい町が出来るのか...ということですね。だから、4万おれば...1万3千ならあこまで行ける...そういうことですからこの高田、7万人いますので十分行ける。そういう意味でヨーロッパから本当に学ぶところがたくさんありますね。オランダのミテルブルグは人口4万ですけども、4万で市役所前広場にはですね、必ず観光案内所がある。日本の観光案内所とは全然違っていて、あのきれいな優しいカラーですね...そして、どんな相談にのってくれるかということ、今日泊まる所がないんだとか、お金はどこで交換してくれるんでしょうか...どんな相談にものってくれる。すると、すぐ電話をして宿の予約をしてくださったり、そういうなんか、非常にマルチな案内所があって、人々が気軽に訪れるような、そういう意味で、こんなと観光の案内書ではのってないですね。ミデルブルクなんてオランダ観光本には載ってませんけども、そんな町に行っても、そういうことを意識している。つまり、外から人が来る。それはあの、長崎の県知事の言葉をいただいたんですけど、「人呼んで栄える町づくり」ということだったんですね。人は人を呼ぶことで町は栄える。その一つの交流の中で、町の未来を考えているというのはやっぱり幸せなことだろうし、これからの町づくりで大事なことだなあという気がします。

あっ!いろいろまだ...日本で行なわれている、あるいは、私が関係しているようなことをちょっと紹介します。兵庫県、今、兵庫県に住んでおりますので、兵庫県のことになりますが、三木市、三木、知らないですか、ほとほとどの方...。だけど、その三木市ここはあの言ってみれば、神戸のベットタウンですが、これだけだと泣かせるじゃないですか...。なぜ、まだ、こんなにおもしろい。しかし、ここまでなんか思いつめたような...。なぜ、まだ...なんか悲しくなりますね、このタイトル。それで、ちょっと紹介させていただいたんですけど、実はその三木の中でいろんなことがやられます。元気な町で在りつづけるための研究からですね。三木の観光化、マップとかいっぱい作っているんです。三木すごくおもしろかったなということに気がつきます。可能性があるな...。1つ努力すると観光地になる、そういうことができる、パツとした町にできる、というくらいのポテンシャルが日本の町にはどこ行ってもあるんですね。そういうことを感じました。大阪の平野...これは、あの去年からちょっと気になるんですが、平野はたくさんの寺が在って、歴史を感じますが、平野御坊...あの、大和高田とか、今井、そういう寺内町の一つだったんですけど、その平野の町がですね、なかなか努力しまして、町づくり博物館と...ま、あの民間の博物館がたくさんあって、で、モットーは代表者を作らな

い町づくりというんですか...みんなが勝手にやるということなんです。で、勝手にやっていると、なんと修学旅行生がぞくぞくやってくる。で、販売体験だとか、そんな時代になってます。で、地元の人と各地から来た中学生が話をして交流する。すばらしい活動が行われている。で、こういうのをみんな中学生が勉強してくわけです。こんなことやっているんですか！そういう学習の対象としてやっているんですね。修学旅行生...。それから兵庫県の三田市、これは私の研究室があるんですが、私の研究室は今、三田の町の中、古い商店街の中に築 200 年の建物をお借りして、そこが私の研究室、ゼミ室になっていて、ここでゼミをやっているわけです。今日もそこで学んでいる学生が 1 人来てくれてますが、ゼミとか夏場は外で、あんまり狭い暑いもんですから、外でこんな感じでやっていると、町の人がですね、一緒に来てですね、いろいろお話をして下さい。まあ、そういう不思議な研究をやっています。もう 6 年半になりまして、日本でこういうことが流行出しまして、全国で 100 箇所くらいこういう動きがでておりますが、私は、その老舗、元祖家元と言ってるんですけど。あの、これは、しかし、やり方として、こういうことをやるのは、そんなに珍しいこととは思ってないんですが、アイデアとしては非常に良かったなと...。え~、ここで学生は非常に良く育ちます。すごく育ちます。あの、商店街の人はみんな頭の回転が早い。毎日が勝負ですから...すごく回転が早い。回転が早いから、人間を見る目が鋭いんですね。そりゃあもう、一目見て人物をかぎ分ける。これは、まあ商売をやっているわけですから、これが毎日の勝負どころなんですから。で、学生諸君に辛辣ですね。実に辛辣なんだけど、心温かい。だから、学生諸君は鍛えられて、ここで商店街らのおっさんいじめられてですね...。最近、就職試験で圧迫面接というのがある。あの就職試験ですね、学生をいじめる。徹底的にいじめる。もう就職試験を二度と受けたくないと言って泣いてくる子がたくさんいます。圧迫面接のような、それに耐える学生がここで育つんですね。まあ、そういうのでは、教育の場としては最高だなと...。え~、ここだと距離的にはですね、梅田から 30 キロ圏ですから、まあここと近いですが、ニュータウンがあって古い町があって農村がある。まあこれも高田と、大和高田と近いかなと...で、え~これがそのセンター街でして、これが非常に古を極めた商店街、老舗です。で、え~本町、大阪にも本町がありますが、全国にあります、本町はどこもだめなんですね...今。その典型なんです。もう、全国ですね、今ね、本町サミットっていうのがやってますね。どこも本町は頭を抱えていまして、やってますが...本町のセンター街・本町センター街、なんかねえセントラルセンター街ですが、ちょっとオーバーですけど、これは昼間だれも人が通ってません。ところが、祭りになると...これがあの夏祭り 8 月...ものすごい数です。これが同じ通りとは思えない。本町センター街というのがありますけど、同じ通りだとむちゃくちゃ人が通りますね。みんな中学生ですね。これ、カラー浴衣ですね。ニュータウンで浴衣を着て歩いたって誰も見てくれない。やっぱり、こういう所は浴衣が似合うんですね。で、それが夕方になると、もっと暗くなってきましたとね歩けなくなりますね、人通りで...。それからですね、10 月の天神さんのお祭り、この時は山車が出ますけど、で、やっぱり、伝統がありますね。20 何台出るんですね。ずーっとね。古い町ですね。祭りの日の翌日だーれも来ない。これがまた驚くべき事実でして、ここが、日本中の商店街、古い商店街ほとんど同じです。大和高田も推測ですが完全に同じだと思いますね。推測はどこ行っても当たる...。本町はみなそう。私は町の大学と新しい環境を作り出した張本人ですが、全国でこういう動きが各地で、京都だとか滋賀だとか高崎だとか早稲田とか岐阜だとか長崎だとか...。いろんな所で大学と商店とのコラボレーションとが新しい関係ができ

つつあって、これはまたおもしろい時だと思います。で、私がやった一つの研究テーマ…子供たちがやった総合的な学習、これはおもしろかった。おもしろかったんですけどね、しかし、一回しかやってないんです。4年前だったかな？もう商店街の人が疲れまして、子供が100人も来たんですよ。それでね～もう二度とやらんと…くたびれまして。学校もでもですね、総合的な学習といって、カリキュラムをやりだして、なんとかせないかん！！…やりたいんですけどね、先生も忙しいですからね…疲れはてて。まああの総合的な学習は素晴らしいと思うんですけど、やり方が見えない。しかし、そこで大学生が絡みますとお互いにすごくいいんで、大学生を絡めることで新しい展望が開けるんじゃないかと僕は思っているんですけど。え～小学校2年生ぐらいがちょっとしんどかったですね。で、私のやっている本町ラボというんですけど、これは研究室です。NHKで紹介されて全国的に有名になった。ちょっと有名になったら、観光客が来るんですよ。北海道、茨城県、岡山県、もちろん近畿からも、韓国からも来られました。観光客の相手をするのは時間が取られるが、逆に情報が入ってくる。自分の方からしかけないと情報が入ってこない。自分の方から情報を発信すると向こうからいろんな情報がやってくる。そして交流する。そういうことで、新しい知識がいろいろ入ってきますし、その縁で、次の展開が自分にも見えて来ることがあります。

話しはわかりませんが、水辺なんかは、水辺が美しいと言うだけで人が来るようになった時代ですね。そういうことも大切、ここにも高田川がありますが、水路として単調になりすぎているんで悲しいですが、きれいな水になるとタマチャンが来る。大阪のど真ん中、船場では、太閤さんの遺産、太閤下水と呼ばれていますが、江戸から明治にかけてのもので、本当の太閤さんの時代のもものは若干しか残っていない。これが、地下に石組みで出来た水路が大阪の船場のど真ん中に、あるということが最近わかりました。これを学生諸君が今、研究してしまして、上を通っている路地が太閤路地としてリニューアルして、路地のネットワークを作ろうと、いま動いています。尼崎では何をやっているのか？これはやっぱり水辺の資源効果ということが論議されている。実は尼崎、公害の町、もうあそこは公害でだめになっただろう？実はですね、これ、尼崎ですけど、ものすごい文化財があるんですね。それを聞きに行ったらビックリしました。すごいレベルの交響楽団をもってますしね、文化の蓄積はすごい！そんなこと誰も知らない。尼崎＝公害…そうじゃない、あそこはガラが悪いろくなこと言われていない。最近尼崎に住んでましてね、こんないい町をなぜ、みんなが見ずてるのか、という気がしますが…しかし、町は、商店街はさびれてますね。で、今、目を付けているのが運河と芋。尼芋という芋があるんですね。まず、運河を再生して運河を遊びの対象に出来ないのか？これは、みんないろんなことを考えているんですよ。ベネチアに負けないような、運河の町にしようかね。こういうこと考えている人もおります。で、ちょうど公害で有名な町になってしまったが…これはやっぱり、客バネで再生しようじゃないか、という動きと今、一緒になってるんですね。水辺のことをみんなで考えようということですね。こんなことをやっていると…。で、えーっと、ふと気がついたらですね、今日はいろんな動きをやったな…。兵庫運河というのがあるんですよ。小樽運河はみんな知ってるでしょ？あれだってひどい運河でしたよ…もう臭い臭い臭い運河だったんです。それがこの町並みゼミのおかげでというんですか、我々応援に行きました。あの運河を埋めてなるもんかと応援に行った。あの頃は我々はもうなんか敵地でしたね。文明の進歩に反逆するやから！！と失礼なこと言われてですね…これは観光客も誰も来てない時代。今、なんですか、もう250～300万人の観光客がわっさわっさと押

しかける、あの小樽運河、それよりも古い、しかもそれよりも長い日本で一番長い運河・・・これが兵庫運河で、これ知らんでしょ？素晴らしい石段があるんです兵庫運河、これはねー売り出せるんじゃないかと思うけど、いろいろやってるんだけど、なかなか売れないね・・・天川さんが一生懸命やっておられるんですけど、しかし、いいあじの建物があるし、水辺もいいし、努力しただろう、努力が足りないんだなと思います。で、設えた尼崎・・・これは負けられんぞと僕が尼崎の人に見せたものなんですけど、尼崎は、あの、整備活動が得意じゃないかと・・・尼崎競艇というのがありまして・・・ま、半分冗談で、この写真を撮る為に若干損をしましたが・・・それから、芋、尼芋というのがありましてね、昔戦前ものすごく人気があったさつまいもですけど、これを復活させて、公害の町、復活のシンボルというのにしよう！これで僕は熱中しているんですけど、えーやっ、それらしい芋がちゃんと育ってくれています。それを今広げようとしています。で、一方でその芋を産業にしよう！あるいはみんなで食べよう！と芋の町づくりというのが今試み中。で、やりだしてから3年なんですけど、今年は芋コレ・・・芋のいろんな食べ方を研究してですね、芋コレと...。芋コレというとパリコレ...というのがあんじゃないですか。えー、芋コレと、こんなことをやっています。で、ま、例えばそういう芋だって、長崎のしっぽく料理こういう知恵を入れたら、よそからの知恵を入れることも大事であろうと。これが私の提案でして、尼も南蛮しっぽく料理という、鯛も尼ダイを入れて考えています。商店街の懲りない面々は、神様、仏様、タイガース様...これは去年だと思うんです。去年のあのシーズン始まってすぐの阪神タイガース優勝祈願とですね、こんな風に商店街ではやっている。ばかじゃないの、と思ったんですが、やっぱり、地道なことやるべきじゃないかと思ったんですね。たまに当たることもある。だからま、商店街のみんな一生懸命売ってます。私この赤いシャツ買って来たんですけど、ま、そういうことも当たることはある。ということで...さあ！！どうする大和高田の衆！というのが、これからのシンポジウムのテーマであると...。で、あの最初にですね、この企画、この分科会について夢咲塾の諸君にどうなさんのか？どんな要請ですか？と聞いたら、あっ！コーディネーターの片寄さんあなたに全部お任せしています。と言うんです。冗談じゃないですよ...この全国町並みゼミというのはすごい集まりでしてね。大学の先生も、大学生もなんのたよりもならない！日本中の知恵者が集まってきたんです。このチャンスを逃してあんたどうするんだ！と、大和高田をどうするかについてもう全国からね、手弁当で自分でお金を払ってわざわざ来てるこの人たちをかもにしてですね、首を絞めてでもいい知恵を出させて、それを地元で根づかせるということがこのゼミの目的ですよ！とだから、大和高田の問題を全部提起して、これは何だ？何を自分に対して求めているのか？それについて、何か一言でも言うことを言わせれば...ま、一言でもいいですよ。一言でも言わせれば、これはしめたもんじゃないかと...これがこの分科会のねらいですよ！と言ったら、あっそうでしたか...と言ってたんです。本当に何寝ぼけてたのかなぁと思いましたよ。ま、ちょっと最初の頃は、激しいやりとりがあって、その結果、皆さんの手元に、大和高田が何を望んでるか？何を悩んでるか？というのを出していただきました。聞いてみると、あんまないんですよ。あんま悩んでない。ま、ええよ...これぐらいでええわぁという気持ちがあるみたいです。そんなに焦っていない。だけど、やっぱり焦った方がいいかもしれない。パッ！としないんだから！！パッとしないと若者も逃げていくかもしれないしね。で、さいわい今日は豊後高田から見えてるんですよ！！豊後高田のカフェバーの女性がね...。野崎ともこさん。豊後高田のね...。先ほどの給食のカフェバーをやってる方...とても素敵の人に来てもらいまし

た。ここはやっぱり切羽詰まった町でしたもんね。ところが、今や、全国区にのし上がった。パツとした町の代表ですね。後ほど、ゆっくり話をさせていただきますので…。さあ、ということで…さあ！！どうする大和高田の衆！！というのが今日のテーマであります。

私の話はこれくらいにしまして終わりたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。

司会者（上嶋氏）：10分間の休憩をアナウンス。

パネルディスカッション

片寄氏：えっとそれではあの一、シンポジウムということで、みんなもう…シンポジウムっていうのはだいたいお酒を飲まないとやってはいけない。今日は酒抜きで真面目にやろうということでありますので。よろしく願います。で、先ほど申し上げましたように、どうする高田、大和高田の衆ということでですね一、最初に、地元の夢咲塾の方々から問題提起というんですか、そんなたいそうなことしなくていいんですけど、こんな夢を描いて、こんな花を咲かそうと思っておるとい話、しかし夢と現実はこうこうであると。というようなことを言っていて。そして、できるだけそこに少しでも接点を持ちつつ、わがまちの話をそれぞれ来ていただいた方にさせていただくと。しかし、あの一、あれですわ。このパネラーの方々とは全く打ち合わせをしていないんですね。で、勝手にわがまちの自慢をとにかくしてもらっていいと思うんです。みんなブランド目指してますし、すでにブランドの所もありますから、うちはこんなにええんぞと。大和高田なにしとんじゃ。そういう蔑みのまなざしで言っていてもいいし、いや一、大和高田きてびっくりしたと。静御前かまいったあとという。あれは参りましたね、やっぱり。こんなすごいまちだったのかという・・・僕はパツとしないまちなんて言ってますかと思ったなと思ってひそかに反省しました。ということで、大和高田の方からまずはお話を伺いたい。えーと、この中で大和高田の地の人、手をあげてもらえますか？あ一、かなりおられますね。はいはい。ありがとうございます。そしたら、共感を持って…そしたら、まず中山さんからお願いしたいと思います。あの、あんまり長くならないように。まだしゃべる人もおりますので。はい。

中山氏：はい。夢咲塾の中山と申します。大和高田の今の夢咲塾の目指すまちづくりということについて、お話ができたかなあと考えておりますけれども。まず夢咲塾というのは、8年前に、高田市が広報で募集したまちづくりの塾、なんですね。で、1期から4期まであって、2年間のそれぞれの塾の活動の中で「もっと何かしたいよ、もっとみんなに何かしたいよ」という思いを持った者たちがこの4月に夢咲塾というのを立ち上げました。詳しい説明はこのパンフの中に載っておりますのでまた見ていただいたらいいんですけども、私は大和高田の今のいちばんの財産は夢咲塾のメンバーだと思っておりますので、どうぞ皆さんのいろんな意見を聞かせていただけたらいいなと思っております。ただ高田がどんなまちなのか、夢咲塾がどんな活動をしてるのかっていうことについて上嶋の方から少し説明をしますので、願います。

上嶋氏：電気を消していただけますか。大和高田の交通体系図ということで、国道であるとか、皆様方のレジュメの中にもコピーしてありますので見ていただければよいのですけれども、

24号線、国道165号線、そして近鉄電車は、2本、大阪線と南大阪線、JR高田、和歌山線と桜井線、王子の方につながっています。だから、これだけいろんな交通が入り乱れている要所というのは、そういう面では鉄道が発展していた時代、鉄道しかなかった時代っていうのはこの町が当然、物流の集積地であったということがわかるわけです。この中心部が寺内町、専立寺を中心とする寺内町、なのですけれども、この中心部というのが中心市街地、ということで発達してきた場所であります。

この赤でかかっている部分が中心市街地ということで、商業的に特に活性化していた場所です。赤の点が専立寺のある場所です。この緑の横の筋が伊勢街道。要するに二上山の方から伊勢までに至るまでの道。藤原京の横大路にあたる道であります。大和高田は近世、江戸前の時代から農業の集積地と言うことで集積したのがこの本郷というところで、在郷町として発達してきているわけです。江戸初期から、この専立寺が1600年に建立をされて、寺内町としての都市計画がされてきたわけです。

さきほど、来る途中、市町を見ていただきました。市町通りにはこういう古い町並みがまだ残っております。ここは、綿花、大和の綿産業を集積したところで、綿問屋さんが連なっていた、と言う名残が今でも残っている町並みです。そういったところで、夢咲塾が、町屋を使ったライブなんかを企画して、こういう町並みは大切だよということを、できるだけ皆さん方にわかっていただきたいというような活動をしています。これはアナウンサーの杉本さんのお宅ですね。一本、こちらの方の、専立寺の前の通りですけれども、レンガ舗装されておりまして、これは吉田市長が元、このまちづくりに奔走された時代に、この舗装や街灯などの整備、いろんなことを、本町の人たちを束ねて、まちづくりをされた結果としてこういう町になってきたわけです。

そして、さきほどもありましたように、こういう祭り。これは御坊まつりの1シーンですけれども、1日に4万人から5万人集めるくらいの賑わいを呈しております。さきほど片寄先生がおっしゃるとおりの状態かなと思ったりもいたします。それで、その中で我々も夢咲見てみて屋というような出し店を出して、いろいろなことをやっております。本町通りにはこういう近代建築も残っております。元銀行だったところです。今日もマイクの設備とか、手伝っていただいております森本電気さんのお宅ですね。こういう近代建築も残っております。産業の集積したところもあって、いろんなものが集まっているということです。これは山門なんですけど、これが、1600年当初の山門がそのまま残ってるわけです。昼間だったらちょっと中が見えないんですけど、夜にこのようにライトアップすると、彫り物がきっちり見えましてですね、なかなかいい状態に見えるんです。こういうすごい町並みが残っているわけです。

我々がその、今回の事業もそうなんですけれども、横を見ていただいたらわかると思うんですけれども、夢咲まちづくりセミナー&座談会と言う垂れ幕がかかっているわけなんですけれども、この11分科会は我々の夢咲塾という立場で言えば、第4回夢咲まちづくりセミナー&座談会という形で開催させていただいております。本町通りを突き抜けると、こういう駐車場が、建物がたっていた後が、駐車場になったりとか、マンションになったりとかしております。これが、近鉄の駅前の商店街。映画館がひとつ、小さい映画館があって、映画監督の河瀬直美さんをお呼びしたときに、ここで舞台挨拶をされております。近鉄高田駅、これが新しくなってペDESTリアンデッキを新設して、すごく近代的なまちになっております。これは奈良市以上のまちづくりができていないんじゃないかと思っております。商業施設、オークタウン、ダイ

エーが入っております、このダイエーのある所というのは、元は日本紡績のあった跡地であります。

JR 高田駅前。JR 高田駅の反対側なのですけれども、このように広い、広場になっております。これだけ広い土地っていうのは、要するに日本紡績の工場があったがゆえにこういう広い土地が残っていたと言うことです。こういうところを利用して、大露天市という形で夏祭りをされると。これも、相当な大きなお祭りになります。今日も通っていただいた天神橋筋、通称さざんかストリートと言うのですけれども、その中で「リサイクルショップさざんか」と言うのがありまして、写真の左の方が笹岡さんという方で、夢咲塾のメンバーです。この売上の一部をもって、我々に対して、まちづくりの援助をしていただいております。天神橋筋という商店街でありながら、バザーを企画されて、ライブなんかもされております。全国的にわりと有名な事業になっているそうです。

昔、公設市場だった町並みです。完全にシャッターが閉まっていて、左側が公園になり、池の敷地だったということで、立ち退き撤去される予定になっております。天神橋西商店街、ここも多くシャッターが閉まってるわけなんですけど、左に写っている派手なシャッターのところがライブハウスでして、若者の寄れる場所としてできてきたわけです。今の時期、この場所で、提灯がぶらさがってくるんですけども、大和ダンジリ保存会というのが、だんじりを動かしています。これは岸和田の方からだんじりを買って、岸和田のひっぱりかたを勉強されてだんじりを動かしておられます。もともと本町、市町っていう寺内町には、だんじりがありまして、それは伝統的に動いている、だんじりなんですけれども、それ以外のこういうだんじりも最近になって動いている。

本郷通り、これは、在郷町として初期からまちを形成してきたところですが、こういう千鳥破風のお風呂屋さんもございます。こういう古い町並みも残っているわけですね。伊勢街道との交差点、本郷通りをつきぬけて、伊勢街道との交差点のところ。伊勢街道に入っていきます。大和高田には、現在二つの映画館があるのですけれども、その一つがこれ、同じ経営者ですね。最盛期は7つから8つの映画館や劇場があったようです。けれども、今となっては二つ。サティがあって、その横には片塩商店街。これは近鉄高田市駅の近くですね。ここは、わりと安く買える町です。片塩商店街にはカルチャーセンターと言う施設があって、文化の発信をこの町でやっていこうというスペースが最近になってオープンしました。サンサンどおり、なか通りとかいう通りに名前をつけられて、イメージを変えていこうとされております。その近くにある竜王宮という神社のお祭りの中でおかげまつりというのがありまして、そのおかげまつりの中で、鳴門の方から呼んできた連を、このような形でパレードをしたりしております。このおかげまつりの基本ベースとなっているのがおかげ絵馬と言いまして、施しをするという絵馬なんですけれども、これがキーワードとなってこのまつりが行われているわけです。夢咲塾もそこに新店して協力をしているわけです。これが元、スーパーイズミヤがあった場所なんですけれども、マンションに変わりました。要するに、スーパーマーケット同士の競争の中で維持できないと言う状態ができてきてまして、商店街の活性化というのではなくて、スーパーマーケットすら撤退しちゃったところがあります。近鉄高田市駅前、これは、大和高田の周辺に行くのに路線バスが行っていない所に関して、大和高田市はきぼう号というのを走らせております。中心市街地の周辺なのですけれども、個別の建物以外にマンションが建っています。これだけ細かい整備されていない道にも関わらず、マンションが建って来ている状態

です。近郊の住宅には、田んぼと田んぼの間をミニ開発して、こういう住宅が立ち並びつづあります。基本的に住宅地になっていってるのです。大和高田と言うのは、そのへんの変貌を考えていかないと基本ベースとしての話ができないんじゃないかと思います。郊外の田園風景。未だに田舎の風景が残っているという感じです。大中公園、春には、こういう桜まつりが開催され、高田川の堤防も整備されていきました。市民の憩いの場としてのまちづくりがされております。

以上、大和高田市は商業の町という形で発展してきたんだけど、だんだん周辺地域の都市化が進んで、全体として、商業地ではなく住宅地になりつつあるというのが、このスライドの基本的なプレゼンテーションと考えていただければありがたいなと思います。

中山氏：はい。今、上嶋の方から大和高田と言うのはこういうまちだというのを紹介してもらいましたけれども、夢咲塾のメンバーも、いわゆる高田、中心地に住んでいるもの、それから代々商売に関わってきたものと、わたくしどもみたいに、今出ましたけど田園風景の中に住んでいる高田市民もいるわけです。それぞれのメンバーの高田に対する想いというのはひとつではないんですね。

商都高田の復興ということで、高田のにぎやかさをもう一度っていう者と、それから子供たちをそだてるためのいい環境を高田につくりたいという者、そういう思いをそれぞれ夢咲塾の中でも話し合っておりますし、高田市の市民の想いはほんとに違うと思うんです。商売の町の復興、それから子育てに優しいまち、福祉に優しいまち、いろんなまちの想いというのがあるはずなんです。で、自分たちの持つてるまちへの想いというのが夢咲塾参考資料のナンバー2の方に掲げてあります。それぞれがこんな思いを持つてるんだというのが書いてあります。

片寄氏：ちょっと紹介してや。

中山氏：あっ、そうですか。はい。これは、昨年11月、夢咲塾というものに変わるときに自分たちのまちはどんなまちであつたらいいんだという思いをみんなで出し合いました。

緑のまち。これからもこのまちに住んでいきたいんだけど、緑がとてすくない。で、緑のあるまちづくりがしたい。それから、それぞれが環境に対する意識を高めたい。また、観光のまち。観光資源がない。全くないわけではないんですけど、先ほどではないですが、メジャーなものがない。目玉が必要。なければ自分たちでつくつたらいいんじゃないか。で、次に思いにむけての意識改革。なぜ、中心地が沈下しているのか、その意識改革も含めて、自分たちで未来の高田をつくっていききたい。新しいものの創造。古くから住んでる人も、新しく来られた方も交流できるまちまた、市内、市外、国外に誇りをもてるものを自分たちで育てていきたい。それが商業であっても文化であっても、それこそ高田というブランドを自分たちでつくっていききたい。で、まちのアイデンティティの推進、それで大和高田が、自分たちのまちがこうありたいという思いを共有することが必要なのではないかと、という思いを致しあいました。そして大和高田の地域を説明して、誇れる高田市民が多くなることでイメージアップが図れる。そういう地域のアイデンティティを代表する人間をつくりだす必要がある。で、どんなまちにしたいのかということ、住みよい町、歴史ある町、他の人に自慢できる町、よい意味で昔から残ってるおせっかいのできる町、住みたい町にランキングされる町をつくっていききたい。

芸術と文化のある町にしたい、また、中心地と郊外とはずいぶん格差がありますので、まちの地域格差をなくしていきたい。これは、面積が小さいんですけれども、商業地、農業地、住宅地いろんなものが混在しておりますので。20年ぐらい前ですけれども、高田の北海道と呼ばれたようなそういう地域もありますので、そういう感覚をなくして、高田市全部が行政サービスを受けられるようなそんな町にしていきたい、でも、大都市ではできないきめのこまかい町をつくってきたいという思いを出し合いました。それで、片寄先生が、じゃあ高田のまち人たち、夢咲塾のまちづくりに対する悩みはなんやねんって言われた時にえーっていう思いで。もう一度夢咲塾でそれぞれの持ってる悩みというのを出し合ったのが、前のページにあります。これは9月7日夢咲塾のメンバーで出された内容を、ほんとに、箇条書きにしたものです。

まず、大阪から20分、25分でこれる距離なのに、人口が増えないことがおかしい。若者にとっても魅力あるイベントが少ない。各スポーツ分野でもぱっとしない。道路が狭い・完成しない。公共マナーがあまりよくない。おいしい食べ物がない。そして落ち着けるような、もちろん喫茶店もない。水道料金が高い。それから、2層化している世代交流を図るのが難しい状況で、若者が定着しない。周辺が合併してますますまちが置いていかれるのではないかという危機感がどこかにある。で、小学校くらいまでは高田に住んでいるけれどもそれを過ぎるとやっぱり高田では子育てができないということで、郊外に引っ越される人々が増える。これは、町に対する魅力がないのでは。で、市の中心に行くのは時間がかかるというのは、小さい町でありながら、交通機関が発達してませんので、お年寄りなんかは、ほんとにこの中心地に出ることができない。少年から青年期の子供の遊び場がない。あと子供たちって...若者にとってはおもしろいことがあまりない。もちろん、楽しみもあまりない。で、町に出てくるこの高田であるけれども、雑然としている。道路が狭い。で、商都高田の復興ということを掲げているけれども、それにこだわりすぎているのではないか。市民のひとりひとりが美しいよい町にしようと思っているかどうか。また、商業以外になにか目標があるのではないか。まちづくりという意識が、住民にどれだけあるのかどうか。あと、高田のイメージが奈良県の中ではあまりよくない。昔の高田の賑わいを、というよりも次の世代を育てる高田をかんがえるべきではないか。子育てや、高齢化社会に対して果たして高田は住みやすいのだろうか。高田の魅力を人に説明できない。魅力あるまちづくりをしたい。高田の若者・・・もうほんとに高田の人たち、若い子は休日はもちろんですけれども大阪へ買い物に行きます。で、まちの中には若者の姿が見れない。高田の歴史や伝統を子供たちに正しく伝えていきたい。高田にも市町通りのように伝統的建物があるんだけれども、それを保存したりカッコよくするための道路や街灯の整備がされていない。みんなが高田の歴史を知っているのだろうか。こういうふうに、自分たちの思ってることを羅列しましたのでどうかなあと思うんですけれども、でも、高田の今の現状を皆さんにそっくりさらけ出すことが、この、さあ大和高田の衆どうする？って言われた片寄先生に対しての答えでもあるし、何とかしてほしいなあと言う私たちの想いでもあるのではないかと思います。

片寄氏：どうもありがとうございました。夢咲塾の夢を聞いているとどあつかましい。(笑) ようこんなこと言えるわ、と思っておったんですが、その次の悩みを聞いていると、うーんうーん、と思わずうなづいてしまうような・・・。まあ、日本中しかし、似たようなもんですなあ。どこもこんなとこばかりですよ。あの、よく見えるようなまちだってね。せいぜいがこ

んなもん。えー、ということで。あの一、こういうお話を頂いたことを念頭におきながらですねー、まずはわがまちの自慢をして、そして、それからあの一なにか一言……。一言いいこと言ってからやないと首しめられるよって言われてますので。どっちからいきますか、的場さんから、ひとつお願いできますか。はい。

的場氏：それではあの一、高田とまるっきりおんなじようなまちの高取からきました的場です。私のまちも今日の先生のテーマにあるように、ぱっとしないまち、というのがまるっきりそのまま当てはまるようなまちでありまして、しかし私のまちには、自慢せえということで。ひとつ自慢して言いたいことは、日本一の山城って言うのがあったんです。あったっていうのは過去語ですね。今は石垣だけしか残ってないんですけど。高取城っていうのがありまして、それにつながって武家屋敷、城下町、越智氏ゆかりの光雲寺等があります。それから、国宝の曼荼羅を持ってる子嶋寺っていうのもあるんです。それから飛鳥よりも多い600基余りある古墳群もあるんです。で、高取の町にはそういう観光の目玉みたいなのがたくさんあるわりに世間から目を向けてもらえないっていう部分がありまして。そのへんから言いますと、高田にもそういう資源が豊富なのではないかと思うんですけども、今日はパネラーで座るより皆さんに意見を聞こうと思って座っているわけなんですけれども。あの一、いちばんちょっと自慢したいなっていうのは奈良県内にも武家屋敷群っていうのはほとんど残ってないんです。しかし高取の場合はまだ何軒かの武家屋敷が残ってるんです。それを生かして高取のまちづくりにしたいなあと考えてるんですけども、なかなかそれを住民の方が理解していない部分がありまして。それをなんとか目を向けたいと思ってやり始めたのが高取の城祭りなんです。もう10何回かは忘れたんですけど。毎年その城祭りには徐々に来ていただける人が増えてまいりまして。今年も11月の23日に行われるんですけども。それに深く関わってきたのが高取むげん塾なんです。で、高取のまちっていうのはけっこう舶来好みっていう部分がありまして。町内でもものが売れないんですね。けっこう外のものが、よそのものがよく見えるっていう住民意識が高すぎて。まちの中で商売してもけっこう商売がなりたない。外にもの売りに行かなければならないっていうまちですね。そのへんが大変あの一……。昔はそれでも商売はやって、高田のようにまちなみとして残ってるんですけども、現代はほとんど商店という商店はなくなってきました、私はパン屋してるんですけども……。

片寄氏：ああ、パン屋さん？

的場氏：はい。

片寄氏：パン屋さんです。ここは市長さんが酒屋さん。はっはっは

的場氏：まちづくりにパンつくるように、寝かして寝かして、してたらええなと思ってたんですけども。

片寄氏：おお、ええこと言いよる。

的場氏：なかなか寝かしてるとみんな寝たままになってしまうというようなまちづくりです。まあ、パンはね、最終的にはぱっと焼いて目を覚ますようなことをせなあかんのです。まちづくりにも僕、そういう風に目を覚ますことをしていかと・・・

片寄氏：みんな、拍手拍手！！

的場氏：(笑)ありがとうございます。あの一、あかんのではないかと思ひまして、先ほどいいましたむげん塾が取り掛かって城祭りというものを。で、あの一やはりまちの外の人が高取のまちに目を向けてくれたら住民の人は何か意識してくれるのではないかと、ということでいろいろ我々は取り組んでおります。その中でも昨年、高取のお城の方で国見櫓と言うのがあって、我々のまちは国見櫓から見たらどうなってるのかっていうのがありまして、その国見櫓を・・・いえいえ。そんな、建てるほどお金持ってませんので。あの、場所がね、ちょうど7年くらい前の台風ですか。山城ですから、木がまるっきりみんな倒れて場所がわからなくなりました。で、その場所を探そうやないかということで、もう一度探して。やはり国見やぐらの場所っていうのは、国だけが見えるのと違って、他のまち・・・天気の良い日には夜なんかだと大阪ミナミの明かりが見える。で、昼間でしたら大仏殿の屋根が見える。というぐらい、昔の人はいいところに国見櫓を建てててんなというのがそのときの気持ちなんですけどね。まあ、僕が言いたいのは、町の人に何とか意識を持ってもらって、自分の町はいいまちなんだっていうことを意識付けたいっていうのが我々むげん塾の考えです。どうもありがとうございました。

片寄氏：パン屋さんがまちづくりやってて、寝かしておいてパッと焼く、これいいなあーこれ。またどっかで、また・・・こうやって仕入れるんです。私なんかね。仕入れさせてもらいました。いい台詞ですねー。では・・・

山本氏：奈良県の五條市という、さきほど先生がおっしゃいましたが、まさにパツとしておりません(笑)五條市から来ました、ああそうですか京都の五条から、ようこそと言われるようなこともあります。えー、この高田から約30分くらい国道24号線走ります。和歌山県、大阪府と実は接しておりまして、紀ノ川、いわゆる奈良県では吉野川とっておりますが、紀ノ川の流域に面した、ちょうど北側にも山、南側にも山、いわゆる吉野群山ですが。そして、真ん中に吉野川、紀ノ川が流れている、そういう五條市でございます。歴史は非常に古うございまして、それは、えーおいときまして。私が現在っております新町通り、新しい町と書いて新町通りでございますけれども。えー、このことをまあ、いろいろとやっておるわけでございますが。この新町の、まあ歴史をちょっと簡単に申し上げますと、レジユメにも書いております通りなんです。

実は、檀原の今井も大変すばらしい、まさに天下一品のまちなみでございますけれども。そのまちなみよりも実は古いと言われております。で、ただなかなかパツとしないと。(笑)これはまた皆さん方のお知恵もちょうだいしたいと思っておりますが。まさに慶長13年、1608年に、この町並みが実はできております。で、1607年の慶長12年にいわゆる日本の中で民家としてはいちばん古いと言われております栗山邸っていうのが現存しておりまして、こ

れ重要文化財になっておりまして、現在も残っておりますし、現在その中でお住まいでございます。で、そんな実はまちでございます。約1キロメートルほどわたりまして、まちなみが続いております。だいぶ実は歯抜けにはなってきたはおるんですが、ちょうどこの、先ほどもちらっとお聞きしました昭和50年に、重伝建の法律が、文化庁でできたと言われておりますが、あ、49年でしたか。で、その翌年の50年に奈良県としては最初に奈良文化財研究所によります町並み調査が実は行われておりました。で、その翌年に実は今井の調査が行われているということでございますが、そういうことで、ある意味では非常に古い町並みなんです、この実は、昭和50年に調査が行われました。そのすごい町並みであるということが世に知れ渡ったわけでございますが、残念ながら地元には知れ渡りすぎまして。逆にそれが壊れるひとつの原因になったということもございました。ていうのは、当時、今はそんなことはございませんが、これすごい町並みやということで。ていうことは、町並みとは家が古いということも含めてなんです、そういう町並みがすごいっていうことになれば、これはすごい、例えば、最近、ていうか当時できた法律によって縛られて、その家を修理もできなくなる、壊すこともできなくなる、もちろん建て替えもできなくなるのではないかという風なある意味では間違っただけという風潮と申しますか、そういうことが実は流れてしまったようでございます。残念ながら一部中心の地域におきまして、約一キロの中でもかなりの部分の中で壊れていきました。で、残念ながら壊れたんですが、それも水害によってやられたというのもございます。いちばん最近ではご承知かと思いますが、伊勢湾台風、もう最近って言っても昭和30年代ですが。そのころにかなりこっぴどくやられました。いわゆる2階のところまで水がきたような、そういう水害がございました。そのから以降、堤防ができましたので、それから後は水害は起こっておりませんけれども、しかしそれによりまして残念ながら家がやっぱりどうしてもやられました。そういうので建て替えも含めて、中が壊れていったということもございます。それはまあ、それとしまして現存はかなりしておりますので。先ほど言いました栗山邸であるとか、県指定の中邸であるとか。そういう建物が現存しておりますし、古い1キロにわたる町並みの部分がかかり残っております。それを我々は保存しよう。当初、保存って言うとなかなか難しかったものですから。それこそ先ほど言いましたようにマイナスになる可能性があるっていうことで、活性化をしよう。ちょっとかっこいい言葉で。活性化をするためにっていうことでいろいろ仕掛けをやってまいりました。で、それが我々新町塾、と言う塾、まさにまちづくりグループ、学習塾ではございません。まちづくりグループでございます。で、まさに、民間主導型で、行政とはいっさい関わりなく、民間主導でできたこの新町塾でございます。で、このレジユメにも書いておりますように平成2年に立ち上がりました。で、それは先ほど言いましたまちが壊れていくのを、例えば、まちなみの中に古い家があるのにも関わらず真っ白の家が建ったりですね、そういうことがひとつのきっかけになっております。今もその白い建物は残っておりますが。これはやっぱりいかなのちゃうかな、この町並みになんでこんな建物があんのかなと。当然、現時点でもそうですけれども一切そういう指定も何もかかっておりませんので、誰が何を、どんな建物を建てようとも一切関係ありませんし、罰金も何も払うことはいりません。えー、そんなことでいろいろやり始めまして。ぼちぼちその何をしようかということやとんでます。一番のその、我々としては、町並みに合うようなものをつくってほしいと。例えば街灯であったり、フェンスであったり、そういうものを町並みにあうようなものをしてほしいということいろいろと働きかけを行いました。で、あの一、今日はちょっとあ

の一、そういう資料はございませんので。また、一番下に、このレジュメの下にホームページのアドレス書いておりますんで。また皆さん方お帰りになってからゆっくりご覧頂いたら。これ私のつくっているホームページでございますけれども。それをまたひとつご覧ください。で、いろんなそういうことをやってまいりました。で、特に我々一番現在メインの事業にしておりますかげろう座という事業がございます。これはイベントでございますが年に1回しかやっておらないんですが、これが実はある意味では大成功いたしました。今年ですでに11年目、11回目を迎えておりますけれども、五條市は、このまちの約半分くらいの、3万5,6000くらいの人口でございますけれども、今年はおかげさまで約4万5000の人がこの町並みにお越しを頂きまして。まさに大阪の心齋橋くらいの、休日の心齋橋くらいの手が、1日だけですけれども出るようになったということでございます。一番最初は、かげろう座についてちょっと申し上げますと、先ほど高田の場合は冬にお祭りが無いとおっしゃっておられましたけれども、我々は春にお祭りが無いんで、春にお祭りをしようよってことで仕掛けたわけです。それで、春って言うたらいつからいつまでかなという。3月も春やし4月も春やし、5月も春かなってことでいつがいいかなと自分たちがいちばんやりやすいときがいいなと。ということで考えたのが5月でございます。5月のいちばん最終の日曜日にやっておりますが。それはなぜかっていいますと、まず外でやるイベントですので。やはり一番の問題は天候でございますんで。雨降ると、やはりどうしても具合悪い。そうすると、天候の安定した時期がいいだろうって言うことで5月を選んだっていうのが、ちょうどまあ梅雨の前っていうのは天候が安定するものですから。それと、最終の日曜日っていうのは、だいたいの皆さん方の給料日が20日から25日くらいだと思うんです。その給料日の後にあると。で、いうことはお越しいただいた方々には、これはフリーマーケットなものですから。お金を使っていたかかないといけないわけで。そのために終わりの日曜日にしたということでございます。5月の終わりやからまだ春でええやろということで、春のお祭りのひとつになりました。五條では夏祭りもありますけれども、たぶん一日のイベントとしてはたぶん五條ではいちばん大きい、4万5000人ということですので。一番大きな数を集めるイベントとなりました。

で、これからは自慢話になりますが、イベントをやるのが我々の目的ではありません。これをやることによってどういう効果が出たかという、今日はこのイベントの目的の一部にもなると思いますが。いろんなことをやってまいりました。当初はまさに小さいところからスタートしました。第1回メインのイベントで、1000人もこなかったんじゃないかと思えます。そういうところからスタートしております。どんどんやっていくうちに広がってまいりました。当初は、いわゆる商店街どおりって言うのが五條には大きな二つがございますが、今ではとんとへこんでおりますけれども。そのふたつの商店街も一緒にやろうよってことで声をかけました。ところが、完全にけっちゃんをくらいました。新町通りって言うのは一部の商店街なんです。が、実質は町並みっていいですか、住宅街みたいになっておりますが、そのイベントをやろうってことで断られました。あ、そうですか、それやったらしょうがないなと。我々だけでやりますわということでどんどんやってまいりましたら。うちも入れてくれませんかということで、先ほどの言っていましたひとつの商店街、最初の商店街が入れてくれませんかと言うことでやってまいりました。我々は、来るものは拒まず。ということで一緒にやろうってことでやりました。で、今年ですけれども、また駅前通にも商店街ございますが、その駅前通の商店街が今年から一緒にやらせてくださいってことで、当初は2、300メートルくらいだったイベン

トが、今はトータルしますと、2,5キロくらいになるでしょうか。実はビッグなイベントになりました。五條駅っていうJRの駅がございしますが、その駅を降りてすぐからスタートしまして、ずーっと行きまして、次の駅大和二見っていう駅があるんですが、そのちょっとの手前まで続くようなイベントになってしまいました。で、これが非常に商店街に影響を与えたってこともございますし、実は役所って言いますか、いわゆる行政の方にも非常に大きな影響を与えてしまいました。で、ここにちらっと書いておりますが、当初は我々の住んでいる新町通りの下水道の工事をするというので。当然ひっくり返して舗装をやりかえるわけなんですけれども。そして中へ下水管を入れるという。それは、大変ありがたいことなんですけど、そうすると、この上の舗装の問題になりました。また、黒いアスファルトの舗装にするんですかと。それならば、せめて我々は、もともとのこの道っていうのは砂利道、土道ですから、それに近い舗装っていうのはあるはずや。なんとかそういう舗装にさせていただきませんかということで我々は市のほうに陳情させていただきました。そうすると、市のほうはああそうやなってことで、それが実はここに書いておりますが、町並み環境整備事業につながりまして、今は国土交通省と五條市がやっております町並み環境整備事業がスタートをいたしました。

それが、我々が陳情したのがひとつの原因になっております。で、おかげさまで・・・

片寄氏：長すぎる。

山本氏：はい、わかりました。まもなく終わります。ちょっと長すぎるということで。おかげさまでそういうことで、市のほうになにか協力することありませんかって言われるほどになりました。それがひとつの大きなイベントの成功がそれにプラスになったといえますか、そういうことがひとつの大きなことになっております。今後、我々は、五條市っていうのは交通の要衝の地として発達してまいりましたので、そのことをひとつ考えながらこの新町地域を含めたこの地域を五條のいちばんの加護にして、ぜひここへ立ち寄っていただけるようなまちづくりを今後とも続けていきたいと思っております。ありがとうございました。

片寄氏：山本さんなにしてんの。うち。

山本氏：うちは造り酒屋でございます。

片寄氏：酒屋のおやじがまたまちづくりやってますよ。おもしろいねえ。なんでこんな一所懸命やることになったんですか。

山本氏：あの一、結局JCってご存知だと思いますが。青年会議所。青年会議所に実はおまして、全国の委員長をやらしてもらってからあっちこっち歩くことになりました。それで、そのことで勉強させていただいて、それを実践してるっていう状況でございます。

片寄氏：ありがとうございます。すごいねー。やっぱり、よその知恵はやっぱり盗んできんやな。それも大事なことでありまして。今日もまたあとでいいことひとつひとつくらい言われると思いますんで。期待しといてください。それではあの、天川さん、お願いします。

天川氏：神戸から来ました天川です。この今会場にいらして下さってる方々で日本地図を白地図で出して神戸がここやと自信を持っておっしゃれる方は何人ぐらいいらっしゃるでしょうか。

片寄氏：ははは。まあまあ。とりあえずまあええやん。

天川氏：(笑)非常に先ほどから皆さん、大和魂というか遠慮深いと言うか、ご自分のところがなにもなにもない、パッとせんって何がパッとせん、1600年も続いているまちとか、400年以上前に建ったお寺があるとかそんなお話しはあって、そんなら神戸はどうしたらええんやろうと思ってしまいますが。皆さんもよくご存知のように神戸は約130年ぐらしか歴史がない、ちょっと地震で10年ほど数字が間違ってるからもしれませんが、たかだか100年ほどのまちです。で、住んでみたい町、訪れてみたい町神戸っていうキャッチフレーズをJRが流しましたくらい、神戸っていう響きが皆さんの中にはお持ちくださってると思いますけれども、実際に神戸に3代住んでいる人はいないっていうのが神戸のまちです。それは、今住んでいる人も旅人のようなものですから、それが住みやすい町でもあると思うんです。全然隣に誰がいようと、越してきた先にどんな町であろうと関係ないっていうのがほんとのところの住みやすい、よさそうなまちやということになるのかもしれないと私はずっとそういう風に思っていました。で、港町神戸を愛する会としか書いてないんですけども、都市計画のコンサルタントの会社に29年勤めております。行政と手を組んで足を組んで仕事をしてきたという立場ではありますが、たてついて、近代洋風建築の保存をずっと訴えてきたのがこの港町神戸を愛する会という会でした。ずっと行政と手を組んで仕事してお金もらってるのに行政にたてついてるという恐ろしい会なんです。それでまあ、住宅地の真っ只中に事務所をお借りしまして仕事をして9年たって、阪神大震災が起こったんです。で、住宅地の中ですから、我々は住んでないところへとことこ通って行って1日仕事して帰っていくという。ただ、ご近所の人は自分たちの住まいのある場所ですから、どこの誰が毎日うろうろ通ってきてるのかわからんという状態ではいけませんので、おはようございます、今日は暑いですね、寒くなりましたね、日が早く暮れますねという挨拶を交わしながら、仕事をしてたんですが、1995年1月17日に、阪神大震災が起こりました。幸いスタッフ6名、ああごめんなさい。そのときは4名ですね。自宅を全壊したものはおりませんでした。ただ、事務所が全壊しました。それで、自分たちの家は大丈夫だったからこんなことが言えるんですが、すぐさま朝の、日が明けてなかったかもしれません。事務所のある場所へかけつけました。そこにお住まいだった方の安否が気遣われたんです。たった9年です。たった9年しかいなくて、朝夕の挨拶しかなかったのに、そこに住んでいるあの人、あのおばあちゃん、あの子はどうしたやろっていうことがずっと気がかりで、朝の7時すぎにかけつけてました。全員です。それでみなさんがご無事やっということがわかったり、ひとつ裏の通りでは二十歳代のお嬢ちゃんが亡くなってるという話やら、90いくつのおばあちゃんが取り残されてるっていう話で我々の歴史があけたようなもんです。そうこうするうちに10日ほどで阪神大震災復興まちづくり市民ネットワークもうこんな長い名前言いたくもないんですけど(笑)それが一人歩きしてしまいまして、市民が復興するのを手伝うネットワークをつくらうっていうことで、10日目です。17日が震災です

から、27日には、すでにニュースを発行してました。それは専門家の立場から、どういう風にまちを復興していくのかということの第一歩を住民の方々に問いかけるというニュースでした。それは今現在も発行しております。そして、それをやりながら、3月には事務所を解体して広場にしました。で、そのときに、やがて夏になる、草ぼうぼうになる。これではゴミ捨て場になる蚊が発生する、子供たちがなにか怪我をしてもいかにというような思いを寒い寒い2月3月に持ち続けて、ある日突然に整備をする前ですから瓦礫だらけなんですけど、ここに花の種をまこうと考えたんです。無謀・・・天川の無謀その1というのがこれですが、瓦礫を耕して、花の種をまいたら、そこで亡くなられた方のお供え花よりも気持ちがしゃんとするかもしれないというのが正直な、これは10年たったから言えることです。正直なところですよ。それで、一挙に走り出しまして、花の種をあちこち電話をして手配をしました。で、5月の末に花の種をまいて、芦屋から神戸市内14箇所、ほぼひとつが1000平米ですから、ずいぶん多くの場所に花の種をまいて、花畑をつくったというのが瓦礫に花を咲かせましょうという学校でした。で、瓦礫に花を咲かせましょうというのは、当然枯れ木に花をとという花咲じじいの話からとってますから、瓦礫ばばあという名前を頂戴しました。私はこの名前が大好きで、どこ行ってもはい、瓦礫ばばあ天川ですという風に自分を紹介することにその日から決めて今まで8年間きたんですけど、ばばあという言葉は自分で言うなという風に女性のご年配の方は必ずお叱りを頂くんです。でも私は震災で、その頃はまだ2年3年5年の年でしたけれども、震災でたくさんの、学生433名ですけども、亡くなられた方々の命をもらってでも、花が咲いた、私たちも生きてるっていう気持ちを大切にしたいと思ってきてますから、普通の人より8倍生きてるんですって、でもばばあなんですって、今はほんとのばばあになりかけてますけど(笑)。そんな風に言いながら、瓦礫に花を咲かせましょうという活動を続けてきました。で、とうとう瓦礫ばばあになったんですけど、それだけでは駄目で、いろんな助成活動のお手伝いをしたり、復興住宅というものが公営で建つことが決まったときに、こんな住まい方をされた方がたぶん住みよいやろってことを提案しようっていうことでコレクティブハウジングというものを考えたり、そういうコレクティブハウジングってなんやってことを説明したら長くなるんですけど、ま、集合住宅、マンションですとかアパートですとかというまとまって住むことにしかならないんですね、戸建に住んでおられた方々も。住宅がなくなっているわけですから。国の施策として、それはしょうがない。そういうふうになった場合、長屋の戸建に住んでおられたお年寄りがほんとに鉄のドア1枚ボタンと閉まって、お隣の声も聞こえない場所で暮らしていけるんやろかっていう風なことを心配しつつ、バラックと言うか、プレハブに住んでおられた方々のところを訪ねて行って、こういう鉄筋の5階、6階建てが建ったときにもう少し住みよいようにしましょうよということを住民の方にも言う、で、それはどういう住み方になるんやということ行政の方にも言う、応援団を作りました。両方への応援です。そういう支援もしました。たくさんの支援をする中で、私たちが3月くらいから8月くらいまでの間に培ってきた、行政がまだ手をつけられない時間。住民もやっと片付いてひと段落次は私は何をやるんやろっていうぼかんと空いたような時期が4、5ヶ月あったということにあとで気がついたんですけど、その間に瓦礫に花を咲かせようという活動をしたり、復興住宅になったらどうなるんやろ、どんな住まい方になるんやろっていう、どうしようもない時間なんですけども、その間にものを考えるという時間をもてたことを非常に大切な時間だったんやないかなと思いました。それで、今日のここにも書いてありますけど、ゆっくりじっくり。ゆ

ゆっくりじっくりしかものはすすまへんねやっっていうことをそのときに、机上ではわかってたんですけど、実感としてそのときに知りました。あの、あせっても、どんなにがんばっても1歩ずつしか前へはいかへんねやっ、ひょっとしたら半歩下がらなあかんねやっことを知りました。で、それだけでやめてたらよかったんですけども、9, 11にニューヨークでテロの事故といいますか、事件が起きまして、私もニューヨークのまちが好きでしたから、それまでも何度か行ってましたし。あの摩天楼のようなすばらしい憧れの的であるあのまちのあのワールドトレードセンターがなくなってしまって、そこで何万人という方が悲しい思いをして、いやな思いをして、腹立たしい思いをしてっっていうことを抱えてる。しかしあそこは利権の塊ですぐさまにでもまた建物を建てて、それで経済を復興していかなあかんていう、そういう話がもう始まってるといったときに私たちは、震災のときに全国から、日本全国からも世界中からもいただいた支援をなにかお返しせないかんと思いついたときでしたから、まあ最初から思ってたんですけど、そろそろお返しする時期やという風に思ってたから、まずいちばんにニューヨークへ、ゆっくり考えなはれや、そんなバタバタせんととりあえずは片付いて、そこで命をなくされた方を一瞬しので、次にもう一回どんなまちつくるんやということをみんなまで考えませんかっっていうことを言いに行こうと思って、瓦礫ばあニューヨークへ行くというツアーをしまして、20人くらいでニューヨークへ行って、また花の種をまきました。で、そこは非常に荒れたところで、あの、もちろんテロの現場には種まきできませんから、少し離れた、ほんとに4、500メートル離れた場所でしたけれども、たくさんの方がやっとその場所へたどりつけるルートをつけてくださって、3ヶ月くらいかかってやっとその案が練れて。で、ニューヨークで種まきをしたんですけど。もう荒れた荒れた荒れた、公園の一角でした。で、そこへ種をまいて、かえってきたんですけど。9月の、ちょうどなかごろに花が咲きました。去年のことです。で、行ったきりでほったらかすのもいかなーと思って、刈り取りにいかなあかんと思ったんですけども刈り取る術もなく、ほったらかしておりましたら、今年も花が咲いてる。去年と同じ花が咲いてる、という連絡がありました。それは明らかにニューヨークのどなたかが花の種をまいておられるんです。何かをするきっかけをつかんでくださった方がひとりでもあったかもしれんやっっていうことをそのときに思いました。で、あの、神戸から来ててもこんなに歴史の深いまちに私が何を申すわけでもないんですけども、先ほど中山さんが読み上げてくださった悩みですとか、ジレンマですとか、もうちょっとゆっくりしなさいよと言うか、もっとゆっくりしてくださいと言うか、そんな人口は増えるわけないんです、減ってるんですから。年寄りが増えてるそうですけれども。その一步に私も近づいているんですけども、あの、子供たちが増えてるわけではないんですから人口増えるわけはありません。そんなことでまちが潤うとか活気付くとかそういうことを考えることではなくって...私が夢咲塾の参考資料その一でいちばんに思ったことは、おいしい食べ物が無い、落ち着ける喫茶店が無い。つくりなはれ。(笑)そんなもん明日にでもできますやん、こんなに豊かな土地ですよ関西は。どこにでもおちてます。おいしいもの。作る術もいっぱいあります。そういうことから始めるんだったら何にも怖ないと思う。水道料金が高い、嘘や。島根県です日本で一番高いのは。ちゃんと調べましょね。先ほど片寄先生が兵庫運河の話をしてくださいました。兵庫県にも誇れるものがたくさんあります。私たちもそこでいかだを浮かべて、あのー、なんかアホのようなイベント、イベントと言っついでいいのかわかりませんが、お祭りをたくさんしておりますけれども、それでも動きません。そんなもんです。なんにも動かないのが

ひょっとしたらまちです。でも、ひとりひとりが動く力を持つ、動かすんやという気持ちを持つということの積み重ねでしかないんやというふうに私は思います。

片寄氏：ありがとうございました。ま、ゆっくりせーやということですね。あの、さきほどちょっと紹介しました豊後高田の・・・ちょっと話を・・・あんな美しい姿を・・・

豊後高田の野崎氏：こんにちは。幸か不幸か、っていうか、たまたま私のお店にこられたお客様からこのお声がけをいただきまして、このゼミに参加することになりました。幸か不幸かって言うのは、ここに立つことが何も予期しなかったことですから、幸せでもあり、ちょっとどきどきっていう意味でのものなんですけれども、ほんとは幸せなんですね。先ほど、市長さんとお話をしまして、ちょっと豊後高田、高田のお話をですね。陸前高田がなくなってしまいました。それから、先ほど陸前ですね。あ、越後ですかね。ごめんなさい間違えました。それから今度、高知県の方にでしたか、安芸高田というところができるということで、サミットのお話も、うれしいな、もしここでお話ができてなんかの起源になればうれしいな、と思いました。で、高田のお話をたぶん、ということなんですけれども・・・

片寄氏：喫茶店の話を。

豊後高田の野崎氏：はい。あのー、昭和のまちのなかにですねー、私がたまたまできたんですけれども。たまたまというか、これはですねー。えー、ここですごくうらやましいなっていうのは、ここに皆さん集ってるっていうのは皆さんの手元に情報があるということなんです。で、私の町は昭和の町として正直言ってブレイクしております。先週も2度ほど全国ネットですね、私の姿が流れるっていうのがあったんですけれども。そういうことでもうブレイクしているっていうことなんですけれども、ここに至るまで情報がなかったんです。ていうのがですね、私は居酒屋をもうひとつ持ってるんですけども、そこにですね、先ほど申しました、先生の、なんかね、ヒョロンキー・トシさんて人が来ましてですね、毎日語るわけです。私に語るわけじゃないんです。仲間たちにこういうまちづくりをしたいんだ、ああいうまちづくりをしたいんだっていうのを、私ミーハーですから、何はなしてんだろなっていうことで。何はなしてるんですかってついついお客様の会話の中に入り込んでいきました。そうすると・・・

若者が集まらない、人口が少ない、1万1千618人くらい。その29年に豊後高田が発足した時が3万人ぎりぎりだったんですね。で、今度、2年後に合併をいたしますが、隣町と合併するんですけども、それをたしてもあと8千人しかたせないんです。つまり2万6千くらい。そういう町の中ですから、どうやって起爆していくかっていうのが、まちづくりっていうんな至る所に・・・まちづくりをしたい、こういう風にしたいっていう人はいっぱいいるんですけども、そのつながりがないんです。情報がないんです。それを、たまたま私は居酒屋の中でお聞きしまして、刷り込んだわけじゃなくて、刷り込んで入れてよ入れてよって。で、何をしたかっていったら、要するに文化の発信地をやりたいなって。すごくおこがましいんですけども、それには集客脳力のある喫茶店なり、集合場所っていうのがほしいって思いました。でも、商売がなりたたなければ、絶対に、どんなにかっこいいことを言っ

ていてもずっと続かないんですよ。で、皆さんこういうお話をしているときに、まちづくり云々って言ってますけれども、例えば今井町のすばらしいまち。さきほど見て参りました。あそこにだーれもお客さんなくてまちづくりがびしっとできていても、きっとひとつも楽しくないんじゃないかと思うんですよ。で、全くお金が落ちなかったらそれほど楽しくないと思うんです。そのままだったら続かないんですよ。気持ちが続かないのかなあ。じゃあそれでどうしようって思ったのが、ダンスホールをつくろうって思ったんです。

片寄氏：ええっほう。

はい。ダンスホールを作ろうと思ったんですけど、それはなんでかっていうと昭和というくくりの枠が立ち上がっておりましたので、昭和の時代にはダンスホールっていうのは、あの、先生、かなり踊られたんじゃないかと思うんですけども、どうですか？

片寄氏：いや、わしディスコの方。

豊後高田の野崎氏：あーっ！ずいぶんごまかしてらっしゃいますけれども。あの、昔からダンスをなさったと思うんです。そして、60代、70代、今はコミュニティホールなんかで練習なさっている段階の世代の方がずいぶんきていらっしゃってるんで、かといって練習はしているんだけど、カラオケと一緒にですね。カラオケを習ってるんだけど、聞いてくれる人がいない。こんなに上手になったのに見てくれる人がいないってね。で、カラオケの場合は時々どっかのホールを借りてやるんですけども、ダンスの場合はほとんどないんですね。で、これは一日千円で一日中踊っていただいてコーヒー付で踊っていただいて、ばばあやじじいがそれこそ10人来ていただいたら、そうですねえ、30日やると30万だ。これは家賃と固定費ができるんじゃないかっていうもくろみから始まったんですけども、残念なことに今やってない。ていうのはこれを今度は空き店舗対策でやったんですけども、空き店舗っていうのは消防法にひっかかってくるみたいねえ。それを知らなかった。それが、悲しいことに現状としては避難場所を確保することによってできるんですけども、お金がないんで今のところは中座しております。で、これとは別に今度は豊後高田の昭和のまちとして、カナヤトシキという、先ほど言いましたほら吹きトシちゃんなんですけれども、平成4年度ぐらいから、いろんなグループのなかでまちづくり、要するに昭和のまちをつくろうっていうのじゃなくて、豊後高田を活性化させたいというさきほどの言葉と一緒になんですけれども、その中の一員として活動していたらしいんです。それも聞いた話なんで私はなんともいえないんですけど。要するにスクラップアンドビルドの、先ほどの先生の場面と一緒にですね、アトムが飛ぶっていうまさにスクラップアンドビルドの世界を考えていたわけなんです。町全体がですね。でもカナヤトシキは違うな、違うなって思ってたらしいんです。でも自分は自分の言いました考古学に詳しい方なんで、なにかやりたいと思いながらも自分の資料を集めて、こういうゼミや、ネットワークの中で生活していたんです。ところがある日突然ですね、要するに、隙間狙いじゃないかなって。逆の発想だと思うんですけども。先ほど画面に出ましたけれども、ミルクケーキがあります。ていう場面が出ましたですね？ミルクケーキは私も子供のころよく食べたの学校の帰りに。でも、そこのおじさんすごい偏屈だったの。もちろん、店のづくりも変わらない。も

ちろん偏屈も変わらない。でも、味も変わらない。それを逆手に取ったんですよね。で、まちの中で、現状で残ってるお店っていうのは要するに漫然と生きてて、努力もしてません。ていうのが事実だったわけです。だから死んでた町で、人も通んないし、通るのは犬と猫。それから、隣に時々回覧板持って行くおばさんしか通っていなかったんです。よくご存知ですね。そういう状況でしたので、昭和のまちを逆手にとって、っていうのと、もうひとつ彼のすごかったなって思うのがですね、隙間狙いって言ったんですけど、明治村もありますし、大正ロマンのところもあります。武家屋敷もあります。寺町もあります。日本中ずーっと見たらここ以外にもすごい歴史のあるところがいっぱいあるんですよ。だから反対にすごく宝を持ってらっしゃるわけなんです。だけど、豊後高田にはいかんせんそれほどの商店街の中にも、ですよ。豊後高田ってまた別のところに仏教文化がありましてそれはそれは栄えてたんですけど、商店街の、彼は商工会のメンバーですから、会議所の職員ですからね。じゃあこれはなんだっていうと、昭和30年代は、豊後高田がいちばん栄えた時代なんですね。で、これを、昭和30年代をくりにしたまちづくりはどこにもない。ていうことに気がついたんです。それと、テーマパークは山ほどある。オランダ村もあるし、いろんなどこありますよね。でも、彼が、生活をしてて、これだけのものはないということに気がつきまして、これを、現市長長松ヒロフミっていうんですけども、前の市長は豊後高田市の住人じゃなかったんですよ。要するにそれだけの人材がないって言うことでよそからひっぱってきて毎日公用車で送り迎えをしている状態でした。で、長松ヒロフミっていうのがですね、県の観光科の部長だったんですね。でもこれ以上あがるとこないっていう一番上まで言ってたんですけどもあとは知事だけっていうんですけども。それぐらいえらい人で今は豊後高田市じゃなくて大分県内で工業誘致をしたところはほとんど彼が誘致をしている。今度、なかつというところにダイハツができますけれども、それも彼の誘致なんです。それだけの手腕の持ち主がたまたまっていうか、運良く豊後高田市の市長にみなさんがひっぱってきたわけです。

...はい、ということで、ごめんなさい。えー、長いということでやめますけれども、それが、運良く、豊後高田市の市長とカナヤトシキの両人のおかげで、豊後高田市の昭和のまちが発展しつつあります。でも、問題はいっぱい今から散在していますので、それをまた教えていただきたいと思います。よろしく。ごめんなさい長くて。

片寄氏：どうもありがとうございました。あの一、市長、ねえ、あんな言われたらかなわんねえ。彼女のパワーっていうのはすごいねえ。おもしろいねえしかし。話が。もっとほんとは聞きたいんですけどすいませんね時間がなくなってしまって。懇親会がこれからございますので。そこでまたいろいろ交換できると...5時15分に終われとすることで。もうだいたい終わってしもたこれ。どないしよう。会場からも言いたい人たくさんおるんでしょうなあ。あとは懇親会でいろいろ話を交わすということでしていただきましょうかねえ。申し訳ないなんのまともにもならなくて。えー、時間になってしまったんですけども、あの、おもしろかったですねえ。僕ひとりだけおもしろかったのか。あの、おもしろかったと思う人拍手してくれませんか？（拍手）あ、よかったよかった。僕もほんとにおもしろかった。やっぱりねえ、生の話をいろいろ聞かしていただくと、こらいけるぞっというなんか勇気のようなものがわいてくると思うんです。あの一、特にやっぱり最後のあの、天川さんからのゆっくりやれやと。あせらんでいこかというこの話もなかなか聞かせどころもありましたし...

天川氏：先生ね、ゆっくりもですけどね、1,5 流でもいいと思うんですよ。1 流にはとてもなれない。なれないっていうと失礼ですけどね。でも 2 流は絶対いやなんですよ。だから、1,5 流がええんちゃうかなーと思う。私はそうやっていこうかなと思ってます。

片寄氏：あー、そうか、そうなんかな。なんかよくわからないですけども。まあ、昔は、ニッキ水の方がうまかったような気がするわ。(笑) 知る人ぞ知るということもまたあっていいでしょうし、奥ゆかしさって言うのもまちづくりの大事なキーワードであると思いますよ。いろんな知恵が出たままで、まとめになりません。すいません。こんなこといったらあれなんですよけどね、ノーベル賞とかそういう宇宙を飛ぶとかね、これが最先端とみんな思ってるんですよ IT とか。違うんですよ。最先端はここなんですよ。このへんがさびしいまちにしたり、ドブ川にしたり、つまらんまち、こんなところで生きてる。これをなんとかするっていうのはね、我々ができるはずなんですよ。できるようできてない。全然できてない。これはねー、最先端の課題ですよ。最先端はね、IT とかきらびやかなところにはないんです。わが足元、すぐのところね、最先端がある。ここで成功すれば、ほんとに、ノーベル賞はどうでもいい。賞はどうでもいいんですけど、あの、我々人間としてこれからどう生きていくかっていうことがいちばん大事なところだと思います。今までの科学技術っていうのが間違ってるんですよ。あんなの空飛んだってしょうがないじゃないですか、宇宙へ飛んでいった手。目の前のドブ川きれいにする方が毎日の生活によっぽど役立つし、幸せな人生を遅れると思うんです。そのことこそが最先端と言うことでやっぱり、一度目覚めていいと思うんですよ。ここに来られている方々はだいたい最先端の方やと思います。一流の方だと思いますよ。ひそかに一流とみせかけながら、実は 2 流、なんて。(笑) そんなことで、まとめにもなんにもならないシンポジウムですけど、後の懇親会が楽しみということで。これで一応 5 時 15 分あのおひらきにしたいと思うんですが、よろしゅうございますか。パネラーの皆さん、どうもありがとうございました。

司会者(上嶋氏)：11 分科会閉会の挨拶と、門徒会館での交流会への案内アナウンス。

交流会の内容：

分科会の後、本堂横にある門徒会館へ会場を移動、夢咲塾の中山代表による歓迎の挨拶、乾杯のあと、参加者各人が分科会で話し足りなかったことなど、立食パーティ形式により歓談した。余興として、ミュージシャンの脇秀樹氏によるミニライブを企画、大和高田をテーマにした「夢咲高田」などの歌を披露、その後、交流会参加者どうしの情報交換の時間を設定した交流、ゲームなどの催しなどにより盛り上がり、会場の外では、夢咲子供灯籠の点灯、山門のライトアップなどを演出し、たのしい交流会となった。交流会が終了後、今井会場より来られた参加者を檀原まで送り、終了した。

今井大会実行委員会への報告：

明日 21 日の分科会報告に向け事前説明を、今井まちづくりセンターにて行った。

今井大会分科会報告会：

11 分科会については夢咲塾の中山代表により報告された。

一握りの町を除く、全国のほとんどの町において、「いまひとつパツとしない町?!」のまちづくりという視点の中で、「そもそもわが町をパツとさせる必要があるのか」という基本的な問いに対して、ゆっくり、じっくり、情報を収集、十分寝かした上で、「ほどほどのまちづくり」という着地点を模索することが今の時代に求められているのであろう。

11 分科会を終えて：

11 分科会は、大和まちづくりネットワークが分担、メンバーである夢咲塾が主にホスト役として開催することになった。当初は、夢咲塾が単独で、片寄氏をゲストにお迎えし、セミナーを開催する予定であったが、今井大会と時期が相応し、また、全国町並み保存連盟の副理事長も歴任されていた関係から、コーディネーター選任の段階で片寄氏に依頼し快諾いただいた。企画の早い段階から片寄氏は大和高田を訪れられ、夢咲塾メンバーと分科会の進め方について打合せできたことは、スムーズに準備することが出来、今回の成功につながった要因と考えられます。

11 分科会においては、全国 30 名、地元 35 名の合計 65 名の参加者があり、用意した座卓がほぼ満席となった。海外から台湾の楽山文京基金会 (Yaoshan Cultural Foundation) の出席もあり国際性豊かな会議となった。基調講演では、片寄氏の意表をつく「いまひとつパツとしない町?!のまちづくり」というこれまで全国町並みゼミでは論議されたことのない視点を出され、全国のまちづくりの成功事例や、過去の未来志向型の考え方にたいする警鐘等、大和高田市を含む日本の多くの町がブランドとして成立し得る可能性と、これから進むべきまちづくりの方向性を考えねばならないことを示された。パネルディスカッションでは大和高田市の現状紹介をはじめ、各パネラーが行っているまちづくりが報告され、飛び入りで報告された豊後高田からは、昭和のまちづくりで活気づいている町の話しをされ、情景が伝わってくるようであった。今回は、パネルディスカッションといっても時間がなく、各パネラーによる事例紹介にとどまり、会場からの意見を聞き出すことができなかったが、基調講演をはじめ経験豊富なまちづくりの事例は、今後各人、各団体が行うまちづくりへのヒントとなりうる十分な枠組みを提供いただいたと考えます。

交流会の進行や料理等、夢咲塾によりコーディネートをした。分科会で話すことが出来なかった事柄を含め交流の場とし、単に立食パーティではなく、情報交換カードという手法により身近にいるまだ話したことのない人とカードを交換、話しをする機会を作ったことにより、一挙に会場の雰囲気柔らかくなり、交流がスムーズに図れたのではないかと考えます。

終わりがけに、多くの参加者よりたいへん楽しく有意義な時間であったというコメントをいただき、11 分科会が意義深い会議として成功をおさめたことを示している。

11 分科会担当代表 上嶋晴久

第11分科会の組織：

全国町並み保存連盟 片寄 俊秀 : 11分科会コーディネーター

大和まちづくりネットワーク

今井町保存会 井上 康二 : 今井大会実行委員(事務局)

五條新町塾 山本 陽一 : 今井大会実行委員

高取むげん塾 的場 照之 : 今井大会実行委員

高取むげん塾 中本 勝教 : 今井大会実行委員

夢咲塾(出席者) 中山 雅子 : 今井大会ボランティア、11分科会報告者

水本 和良 : 11分科会サポーター

阪本 昌敏 : 今井大会実行委員

上田 泰史 : 11分科会サポーター

涌田 五月 : 今井大会ボランティア

平郡 正啓 : 11分科会サポーター

仲林 参代

出野 美奈子 : 今井大会ボランティア

上嶋 晴久 : 今井大会実行委員、分科会担当代表

高橋 伸夫

萱澤 昌子

佐藤 博美

平井 久雄

福本 徹

森本 博

山口 容視子

森 裕喜

中山 哲夫

学生サポーター 井後 三千代(関西学院大学): テープ起し担当

磯崎 弥生(奈良女子大学): テープ起し担当

大西 直樹(九州大学) : 写真担当